

和漢語文研究

第 21 号

中国における近代的読書成立過程の研究 序説

小松 謙 1

詩人・中川省三—その作品と表現

内田 夫美 23

—佐藤春夫序『中川省三詩集 遺着』—

先秦期のいくつかの文法原理について

前田 宏樹 52

—動詞「胃」の特異性、及び「是」が何故繫辭化したか—

物語要素としての圍碁

西尾 和子 62

—『太平廣記』を中心に—

短篇白話小説の語り手介入文について

大賀 晶子 77

—「三言二拍」における「説話的」の用法を中心に—

『封神演義』『堅瓠集』の清籟閣藏板本と楮人権

尾崎 勤 100

尾崎 勤

『隋唐演義』・『混唐』・『征西』の関係性について

永井 もゆ 130

永井 もゆ

『紅樓夢』甲戌本・己卯本・庚辰本の関係

李 沫 148

李 沫

「舜子變」訳注(二)

大賀・川上・小松・孫・田村
永井・藤田・宮本・李

『鶯塚千代廼初声』三編・四編 翻字と注釈

藤本・佐々木・久保・田中
岩崎・西垣 206

206

174

148

130

100

77

62

52

23

1

『鶯塚千代廼初声』三編・四編 翻字と注釈

藤本 灯・佐々木委久・久保 柊子

・田中 百花・岩崎凜太郎・西垣 楓薫

はじめに

本稿は、『和漢語文研究』二〇号（二〇二二）に掲載された『鶯塚千代廼初声』初編・二編 翻字と注釈の続編である。本作品は二編までは松亭金水、三・四編は山々亭有人によって著された。全四編であるため、翻字と注釈も本稿で完結となる。

なお、筆者らが三・四編（巻尾広告を除く）の翻字をおこなう中で、表記上のいくつかの変更点に気づいた。まず二編までと比較すると、三編以降は句点の付与がごくわずかになっている。このままでは読解が不便であるため、句点相当があるべき文の切れ目を筆者らが任意に判断し、当該箇所を半角スペースで示すこととした。助詞「へ」を表す「に」や「ム（ごさる）」、合字「む」も、初編・二編には見られなかったが三編以降は普通に用いられる。また、

人名の振り仮名の変化（重三郎「ぢうざふらう」↓「ぢうさ（ぎ）ぶらう」）があり、その他誤字誤訓（3中2才5「俱不戴（ぐぶさい）天」・3中16ウ2「俱不戴天（ぐぶさいてん）」・4上13才8「俱不戴天（ぐぶさいてん）」―いずれも「不俱戴天」の別形「俱不戴天」の「戴」字の読みに関わるもので、類似字形の「載」に引かれたものか。中央の例は漢字も「載」とする―、4中8才8「小繩（うるさ）さ」―繩は蠅の誤字か―など）、仮名遣いの不審な点（3上3才「しずか」、4上14ウ7「船積（ふなずみ）」など初編・二編には見られなかった種類のもの）も見られたが、それらはいずれも原文ママとしてある。

凡例は原則として前号に示したものを踏襲するが、前号凡例への追加事項と前号凡例からの変更点について、次に示す。

○前号凡例への追加・訂正

・凡例3に次の一文を追加する。「また、「見」を字母とする「み」と漢字「見」との区別が困難な場合は全て「見」とした。」

・凡例4に次の一文を追加する。「また、助詞「へ」を表す字（字母「江」）について、「江」を用いて示した。」

・凡例5（区別した漢字）に次の字を追加する。「支／事」「开／其」「艸／草」

・凡例6から「ただし、漢字1文字の繰り返しは原本の表記にしたがい、「々」と「と」を区別して示した。」の文言を削除し、原本の表記によらず、すべて「々」とする。

・凡例7に次の事項を追加する。「亠（こと）」「方（より）」「ん（なり）」「ム（む）」「さる（さる）」の字を用いた箇所がある。」

・凡例14に次の事項を追加する。「広告の開始位置に「広告」と記入した。」

・凡例16に次の事項を追加する。「その他、原本の字下げ箇所は、一字下げで示した。」

○前号本文の訂正

・「こ」を用いた全8か所を全て「々」とする。

・初編下13ウ8 「みれ」↓「見れ」

(上・口1才)

天道は善に福して。悪に禍す。孝子は身終まで。父母を慕ふなどは等は言はずと御存なり。愛にひらけるひと巻は。彼の大本を和げて古代を世話の人情物。うはべは色になまめけど。其内証は孝信を。素に情の愛別離。いやな風にもなびきあふ。青柳ならて中へに黄金と義理に色替ぬ。松の位の太夫職。意気知を磨く貞操節義。又雪中の

(上・口1ウ)

お梅か苦心。やかてそ開く奈良七重。九重太夫か妹のお八重。深山のはなのつほみをは。都にうつして薫らせる。古今未発の妙案と。趣向は胸に山々亭。貴嬢好男子達の御鼻肩と愛敬おほく有人ぬしか綴りなしたるかなぶみは見るたびことに聞たびに耳新らしき初音鳥。鶯塚の三篇に。序文を是非

(上・口2才)

と乞るま。をこがましくも筆とりて。おもしろいといふ証人に。きつとたちたる遊戯の友。蝸牛が軒に

しるすのみ

永代浦の隠士

温克松円

(印)

(上・口2ウ・絵)

おむめ

お花

(上・口3才・絵)

五龍葎／さよ更て／しすかに／露に／やとる月

おいく

*てんどうは善(ぜん)に福(さいわい)し淫(いん)に禍(わざわい)す…(書経・湯誥)の「天道福善禍淫、降災于夏以彰厥罪」による。天は善人には幸福を与え、悪人にはわざわいを下す。『日国』

*彼の大本：読本『長柄長者・絵本黄鳥墳』(栗杖亭鬼卯作)を指す。正確には『絵本黄鳥墳』は「半紙本」で「大本」より小さいが、人情本より大きい。

*まつ位の位(くらゐ)：(3)江戸時代、遊女の最上位である大夫の位のこと。また、その遊女。『日国』

*山々亭：本作三、四篇の作者である山々亭有人のこと。

*蝸牛が軒：自分の家指して謙遜する表現か。【参考】まいまいつぶらも一軒(いっけん)の主(ぬし)：カタツムリのような小さなものでも、一軒の家の主人であるということ。小さくても主は主だといふたとえ。『日国』

(上・口3ウ・絵)

むかしから／よく見へらさず／けふの月／竹苞源の助

(上・口4オ・絵)

忠太夫

(上・口4ウ・広告)

鶯塚千代迺初声

四編大尾近刻

松亭金水遺稿／山々亭有人編次／孟齋芳虎画／文永堂寿粹

(上・1オ)

鶯塚千代迺初声三編巻の上

江戸 山々亭有人編次

第一回

はかなくもけふの別のおしきかな いつかは人をなからへてみむ

とは 賤傀儡が詠哥ながら勅撰にさへ入しとかや 爾ば佐々木

源の助は彼のお哥重三郎などに父が横死を物がたり直に

揚屋へ踏込て帯とかいへる曲者を唯一ト討とおもひしが

若運尽て。其俣に返り討となりもせばお梅が歎き。いかばかり

(上・1ウ)

殊に長者に跡の難義を掛るも本意にあらねばひとまつ

今宵は立戻お梅に疾と言さとし。せめて長者や忠太夫に

余所ながら暇を告再度此地に来るとも彼の九重を根引

せん 相談最中にあるなれば。未四五日は逗留なさんト。孝

道無二の壮士ながら。なまじ情に引かされて。开がま

長者が許に戻り義理ある父と忠太夫にせめて一筆言遣んと

硯引寄摺ながす墨も泪に。にじみがち 様子しらねば娘の

お梅唐紙明て手をつかへ【梅】「今日はお寺参りからどちらへお住

(上・2オ)

遊しました【源】「慈母の仏参から久しぶりで諸方歩いて来ま

した【梅】「夫はさぞお艸臥でムりませう。お国元へでもお出

遊すお手紙でもムリ升か【源】「ナニ。コレハ。書。ナニアノ書かけ

た物があつたから忘れないうち書付けて置うとおもつてサ」

【梅】「もうそちこち亥刻でもムりませう お書物は亦翌日

と遊してモウお伏寐遊しませな【源】「そんならモウ寐ると

致やう お梅お茶を一ツおくれな【梅】「ハイ」ト返りて次の間へ立

たる跡にて手ばやくも彼書置を認て上書なさんとなし

(上・2ウ)

たる折【梅】「ハイお湯の熱が下りましたから大きにお遅りました」

【源】「ナニゆつくりで宜すた」ト言つゝ茶碗を手に取んとしたる

時に縁の下より突出す白刃におどろくお梅を源の助は制し

止め手に持茶碗を白刃の上へあびせかくれば椽の下に忍びし

件の曲者が肩のあたりへしたるにぞ手答ありしとおもひ

違ひ白刃引拔其俛にいくともなく逃うせけり 其時源の助は
お梅を近く打招き【源】「今日刃を突き出したは此間も云通り自己が
斯して来たのを慈母さんは極不承知 夫故にこそ人しれす自己を

(上・3才)

殺す工みと見へる。ア、してお茶をかけたのは只さへ閣僚の下茶だか
血だかわからないから手答が有つたと案堵して逃して仕舞た
のであろうヨ 併今夜は、のがれても自己が爰に居る時は。また
毒殺とか何とか品を替仇をなすに違ひない 殊に望のある
身の上是非旅へ出なければならぬと言つた子細は何を
隠そう。素自己は河内の国嶋野の郡司佐々木源太左衛門が
忤 父はいづぞや嶋田の宿で具足櫃の間違から加賀の
国の矢ツ張佐々木源太左衛門といふ者のために非業の御最

(上・3ウ)

期被成しより家は叔父の源吾といふ者に押領され母
諸ともに国を出て乞喰と迄姿を替探せどいまだ手
かゝりもしれざるうちに母人も續いて非業にお果被成是皆
敵 源太左衛門がなす業と其無念片時も忘るゝ隙はなけれ共
忠太夫が段々／＼と支をわけての頼み故終に其意に随つて
はからずお前と寐席をともしにするのも前世の因縁 斯して
夫婦となつて見るも竟其情にひかされて今日は翌日はと
日を送るうち此頃嶋原に帯大尺と更名して幫簡

(上・4才)

末社に尊敬られ時めく客は紛ふかたなき源太左衛門 今日直
にと思つたがモシ運尽て敵の為に返討となる時はお前の
歎きもおもひやり一ト先帰つて得心させお父上様にも忠太夫に
も更のよしを書置して今宵ひそかに家出をなし。これ

より直に嶋原へ立越年頃日頃の癖憤を晴さんと
思ふなり 若運尽す敵を討再度嶋野の郡司となり
父が家名を起さん時かならずお前を迎ゆる間煩ふてはし

たもりやるな言迄はなけれども父上様へは二人前孝行尽

(上・4ウ・絵)

(上・5才・絵)

源の助
お梅

(上・5ウ)

して被下よ 若又武運つたなくして返討となつたらば
お前の手から香花を手向て貰ふが身にとつて名僧知識
の回向よりはるかに増る功德そや 亦父母が忌日に香花
手向一扁の念仏唱へて賜はれかし 父が忌日は夫の日にて
母が忌日は彼の日一ト流石に猛き武士も義理と情と思
愛のきつなに引れ暫時はひたんの泪に暮居たる お梅は

*香花…こうげ(古くこうげとも)。仏前に供える香と花。また香花を供えること。
六種供養の一つ。華香(けこう)。こうばな。(日国)

兎角の返りさへ泣より外の哀ぞなく余所の見る眼も

あはれなり 漸く涙の顔をあげ【梅】「身にはつづれをまどふとも

(上・6才)

往古床しきお方とはぞんじながらも誰あろう鳴野の郡

司が若殿とは神ならぬ身の存ませず 長者連の望がねとなる

のがなんの御果報ぞ 其帯とやら源太左衛門トやは尊君に親御の

仇なれば吾儕が為にも親の敵 せめて一ト太刀恨みなば町人

づれの娘でも艸葉の蔭の父上もゆるして夫婦にして下さろう

足手纏ひと思しめさず野の末山の奥迄も連れて退て

下さりませ 若亦御運つたなくして御返討となる時はともに討

れて迷途とやらの父上や母様の御機嫌取のが吾儕の望跡へ

(上・6ウ)

残つて香花を手向て呉とは忌しい。ソリヤどうよくでムリ升と

泪ながらにかき口説娘心の切なる不便とおもへど声をはげ

まし【源】「二ト通りは尤だが郡司が伴源の助 父の敵を討時に

女を連しと世の人に笑はれては自己のみか父の名迄も出す

道理 自己について往時は亡舅には孝にもせよ 現世の親

には不孝至極 親の慈悲に愚はなけれど取わけて長者

殿お前の愛に引されて乞食非人を聲にとり此身代を

譲ろうとは勿体ない共冥和ない共詞に言も尽されず長

(上・7才)

別といふではなし 今宵にもあれ敵を討は日あらず本領安堵

せん 左様して見れば半月か遅くも一ト月待つには

晴て夫婦とならるゝ程に爰の道理を聞わけて跡に残つて

待となら此世はおろか未来永く替らぬ夫婦 若亦

達而聞わけなくば妹背の縁も是限りいかに——と問かけ

られはふり落る泪をば肌着の袖もて拭ひながら【梅】「生者

必哀は世の習ひ 逢ふものははなるゝと其理は能ぞんじて

居升が命に換た大事の良人 若是限りのおわかれと

(上・7ウ)

なるかもしれぬと被仰門途 どうマア笑つて居られませうトは

いふものゝ年頃日頃御串難辛苦を遊ばした其甲斐有

て帯とやらに名乗合時来り いはゞ目出度此門出

吾儕も今は武士の妻 モウくお止め申ませぬ 首尾好

敵を討あふせ本地へ御帰参遊すを必ずお待申升」と

泣ぬ顔してにつこりと笑ふは泣に弥ましてあはれさ。いはん

かたもなく源の助は落かゝる泪を肩ぶたに喰しはり【源】「ヲ、で

かすく夫でこそ武士の妻 非興未練の源太左衛門何程の事が

(上・8才)

有う 本望とぐるはまたく間 必ず吉左右待てお在」といひ

*達而したつて：(一)無理を押しでもしやにむに物事をするさまをいう。強いて。是非とも。無理に。『日国』

つゝ雨戸を細目に明外面を詠めて【源】「思ひの外に夜も更た様子今から出かけるから父上と忠太夫に此書置を差あけて猶委敷はお前から能うくお咄し申てお呉い」

【梅】「夫ではモウお出かけ遊しますか随分お身を大切に」【源】「お前も体に気をつけて」ト【梅】「お牧さんか被下物をうつかりと喰ないやうに其他お牧さんから父上さんにあげる物にも気を付けて身大事に時節を待ナ」【梅】「畏りました左様してお召は」

(上・8ウ)

【源】「此假で宜其腰の物を」【梅】「ハイ」ト返り取いだす刀ならねど若此まゝきれもやせんかと柄糸の唯つかの間も忘れず割筭の別れてもいつか下緒の結ばるゝ時こそあれと両の眼に浮む泪を見せじとてうつつむきながらさし出すかたなとる手も力なく同じ思ひに見かはす顔振りの袂に持つ鞆もはなしともなき姫駕の敷きからむ愛別離苦果しなれば源の助【源】「今もお前の言通いは目出度此門出祝にいはふはづなるを忌しき泪顔夫でも武士の女房か」と叱り付け

(上・9オ)

られ漸々にとらへし鞆をそとはなし【梅】「実正に目出度此門出不吉らしい泣顔モウ泣はいたしません程なく目出度お帰りを」【源】「待てお在」と言さまに庭の切戸を押明て跡に心は残れども云甲斐なしと自己と我心励し足疾に嶋原さしていそぎ行けり

第二回

跡にお梅は正体も泣の泪に打伏しが、ひとり心におもへらく我背子いかに猛くとも業平源氏をあざむける其艶

(上・9ウ)

腕で帯とかいふ時めく仁と立合は一人勝負は兎も角も従ふ者も多からんに多勢に無勢の御勝利は覚束なしと娘気に良人の勝敗心元なく思ふものから起あがり及ばぬながら跡追つき一ト太刀なりと良人の加勢なさまくものと身支度を。なさんとしたる折からに彼の唐琴のこゑすれば【梅】「ヲ、唐琴は何所に居るそなたが仲達してくれた殿子は今宵お家出なされ往うとおもへ」と此聞に方角さへもしれぬ故。何卒導しておくれ何所に」と唐琴が声を

*非興未練し卑怯未練：用例「かく一人を切り取れば、この家の主を何害せん。卑怯未練に包み隠す谷五郎ならず、汝のごときへのろく武士、敵などとは事をかして、一度にかゝれと身構へたり。」卑怯未練の台七なれど、アレ、今の如く飛道具にて取り囲まば、貴殿孫呉が術あるとも、などかこれに敵すべきや。」(いずれも新編日本古典文学全集『浄瑠璃集』「基太平記白石断」より)

*非興し比興：(一)「ひきよ(非興)」の変化した語。一説に「ひきよ(非興)とも」(二)「いやしいこと。つまらないこと。とるに足りないこと。そまつなこと。また、そのさま。」(三)「あさましいこと。みつともないこと。また、そのさま。」(四)「ひきよ(卑怯)」に同じ。『日国』

*未練：(一)「まだ事に熟練していないこと。また、そのさま。未熟。『日国』」*姫駕：萬の小さく愛らしいもの。転じて、男性にすがりつく意で、若い女性をたとえてもいう。『日国』

(上・10才)

しるべに斗らずも幾間隔てし小座敷へいたれば爰に引廻す
屏風の中は継母のお牧と件の大仁が密会の場に

有ければ。「コレへ」トばかりおどろきて逃んとなすを大仁が憎ツく
き女郎と飛かゝりお梅を膝に引すへて【大】「コリヤめろう 何しに
汝は爰へ来た 斯いふ始末を見られたからは不便ながらも生て
はおかれぬ 観念しろ」といひながら有合枕振あげて打んと。な
せば声ふりあげ【梅】「マア〜お待下さりましたつた一言御両所へ
申上りたい事かござり升 何卒〜」と手をあはせ詫れば大仁

(上・10ウ)

せゝら笑ひ【大】「なんだ 言たい事がある 源の助への云伝か 忌〜
しい 其様事聞耳ないは」トまたも枕を振あげて打んと

なすを【牧】「ア、お待 大仁さん。こんな所を見られたからは。どうせ生し
ちやア置ないが 言たいことは。どんなことだか聞てやつた其上で
打殺しても遅くもあるまい【大】「鳥のまさに死んとする時其声
かなし 人のまさに死んとする時言事よしとか古人もいへは一ト言
ぐらゐ。ぬかす間待てもやろう 第一うぬは此夜更に何用
あつて爰へ来た【梅】「サア爰へ参つたのは何所ともしらず唐琴の声

(上・11才)

する故そこか爰かと竟心なく参りました 源の助様の躰入も
父上様の御不承知も継母さんのお執成で夫婦になられた其

御恩といひ夫でなくとも養ひ親は産の親より深い恩とものゝ
本にも書てあり なんの事に申ませう 殊に今宵源の助は諸
国遍磨いたすのが兼ての望みで今しがた家出したれば吾
儕も跡をしたふて往つもり 今吾儕を此所で尊君か殺せ
ば父上さんのお疑ひがお二人りに掛ますまいものでもない 書置を
して家出をすればお二人様に掛ますまいものでもない 書置を

おまき

大仁坊

(上・11ウ・絵)

おまき

大仁坊

(上・12才・絵)

にくき名も／うまれつき也／鬼あさみ／竹立

お梅

(上・12ウ)

道理 何卒お聞わけ遊して命助て被下まし」と身をふるわせて
侘ければ【大】「なる程 此所で殺せば跡の難儀 併不思議なはアノ
源の助」と言つ、お牧と顔を見合る「是れ死に難し殺さんなせし程也」【牧】「そんな

*鳥のまさに死んとする時其声かなし〜鳥の將に死なんとする、その鳴くや哀し：
鳥の死にぎわの鳴き声はまことに悲しい。「人の將に死なんとする、その言や善し」
という句の意味を明らかにするための対句、死にぎわには本音がでるといふたど
え。*論語・泰伯「曾子言曰、鳥之將死、其鳴也哀。人之將死、其言也善」『故
事俗信ことわざ大辞典』

ら源の助の跡をしたつて家出をするといふ書置をさつさと書ナ
サア硯箱も爰にあるヨ疾く〜とせき立られ父と妹へ書置を
書んとなせど兎に角に先立物は泪にて妻を鹿の命毛
も若是限に絶もせば海山尽ぬ御恩さへ送らぬのみか我
まゝな無理な願ひも無理とせず未其上に逆さまなお歎

(上・13才)

掛る忽体なさと筆の運びもはかどらねば【牧】「何をぐづ〜
泣てるのださつさと書てお仕舞な」【梅】「ハイ」ト返りて漸〜と
件の書置認れば【牧】「ドレ〜見せな是てよし〜」【大】「ドレ
〜宜〜そんなら是を手前の手箱の上へ置がい〜」【牧】「是を
お前へあげるから路用にしてさツサト往や」トかたへの手箱より金
子一ト包取出してお梅が前にさし置ば【梅】「難有うムリ升」ト
押いたゞいて立んとすれば【牧】「コレ待や」【梅】「ハイお呼遊しましたか」
【牧】「コレもし源の助に逢たとて必ず此事咄すまいぞ」【梅】「御心に

(上・13才)

及ばぬんで此事咄しませう」【大】「夜明ぬうちに疾往」【梅】「ハイ」ト
返りて我部屋に戻りて件の書置と前にわたせし
源の助が二通の書置其俣に手箱の上へのせ置て。これも
庭口より馴し我が家を跡に見て踏も習はぬ夜道さへ
良人恋しき一念に伏見をさしてぞ急ぎ行ける跡に大仁
突起あかり【大】「自筆の書置あるからは大丈夫とは言ものゝ
お梅が生て居るうちは枕を高くは楽しめぬ是よりすぐに跡

追かけ殺して仕舞が上分別」【牧】「吾儕も素より其積り

(上・14才)

夫にしてもお前が工みの椽の下から源の助を遣る注文の
どうして手筈が違つたか」【大】「忌〜しいが今となつちやア跡の
祭。トハ言ものゝお梅めも最出かけたに違ひも有め〜」【牧】「よもや
ト思へど念にはねん吾儕がひとつ見て来よう」とつかは立て
往たりしが程もあらせず帰り来て【牧】「大丈夫〜手箱の上に
書置が三通殊に庭口も明ばなく懐剣迄も持出したれば
モウ今頃はなんぼ女の足だと云て七八丁は往たるう」【大】「何所へ
往たかしれね〜が大かた伏見に違ひも有め〜」【牧】「そんなら疾く」

(上・14才)

【大】「合点だ」ト言さまに尻さんのづに引からげ是もおなしく
庭口より跡追かけていそぎ行けり
斯て翌朝長者をはじめ家内の男女起出たれど未だ
お梅夫婦の起さる故如何なせしと忠太夫の娘お幾が
お梅が居間へ来りて見れば書置も見へず。コハいぶかしと
そこ〜を見れば手箱にのせたる書置いそぎ开がまゝ
長者が許へ持出れば忠太夫お牧も其座にありしが

*とつかは：(副)「かわ」は接尾語。「と」を伴って用いることもある。(二)あ
わて急ぐさま、せかせかするさまを表わす語。卒然。『日国』
*さんのづーさんの図：(馬のしりの上部、腰に当たる所を三頭(さんず)とい
うところから)人のしりの上部。『日国』

彼書置をひらく間遅しと読くだして。かたみおど

(上・15才)

ろき別て長者はあるにもあられずしばし泪にけれれば
お牧もともに空泪 歎の中に忠太夫は源の助が斯ある
事は。はじめよりの約束ながら非人より長者の躰となり
給ひなばおのづから諸国巡る其念も止まるべしと。おもふに
増りし天晴義心。夫をしたふて家出せしお梅様も貞
女なれど。諫むことは漸少し歎は去れど開がまゝ
に捨も置れず八方へ人を出して尋れど曾て行方は知れざりけり
鶯塚千代の初声巻の上終

(中・1才)

鶯 塚千代 遇初声三編巻の中
江戸 山々亭 有人編次

第三回

恚而源の助は足をばやめ彼の嶋原に至りて先お哥が門を
音信しにいまだ碌さる歎疾起しかさゞめく声の聞へければ
【源】「モシお哥さん未お寝ないのか」「哥」「イヤ若旦那
ぢやア有ませんか 嗚呼お運うムリ升た【源】「運イとは何を」「哥」「マアお聞
被成どういふ理屈だか昨日お前はんがお帰ん被成ましてから急に身

(中・1才)

請の相談が出来て最う少し先刻かた此廓を太夫さんも

帯さんも駕でお出被成ました」といふにおどろく源の助「シテ方
角はどの辺へ往たか 様子は聞なかつたか」「哥」「は敷やうすは知り
ませんが慥大坂の蔵屋敷とか貸座敷とかへ行くといふ事
有升は【源】「大坂とあれば伏見海道そんなら直に跡追欠」「哥」「モシ
今からいくら追欠ても追付ことじやア有ません 何をいふにも一時
余羽根が有てもちよつくらと追付わけには往ますまい 夜が
明てから大坂へお往被成ました所が太夫さんを連たお武家しれ

(中・2才)

ないことも有升まい」「【母】「お疾お往被成ばよいとお哥
とも今のいま迄お噂申ておりました お腰かけでは何や
彼のお咄しも出来ませず マア〳〵おあがり遊しまし」ト母が
こと葉に源の助 座敷へ通りて嗟歎なし 嗚呼自己なま中の
情に引れ俱不戴 天の仇敵を失ふのみ歎 孝も廢信も欠ケ
おもへば自己こそ乱理の仁。父についでて因果たる作左衛門こそ浦やまし
弓矢の神にも見放されよ〳〵武運に尽たり」と歎息なす
こと数回 老母は泪咳に打紛らして小膝を進め【母】「二夫も是も

(中・2才)

皆時節 凡夫盛んに神たゝらずト未だ其帯とかいふ奴の
天命帰する時節が来ないことと見へます 往きもお哥に申た
こと。せめて吾儕が今十五年前であらうなら女ながらもお主の仇
亦ふたつには自己子の敵 一ト太刀なりとも恨まんとおもへど今は
老の坂腰は二重に手はふるへ菜拵の庖丁も漸く持るこの

体」トいふをお哥が引とつて【哥】「吾儕も御主人様や兄さんの敵跡追
欠てとおもひましたが。そんなことも有升まいがよしんば首尾克
吾儕が帯さんを殺すにもしろ夫では貴君が年頃の御辛難

(中・3才)

も水の泡夫のみならず仕そんじて敵を持身のことなれば他にも
佐々木の余類もあろうと先方で用心する時は劫て害を招
ぐ道理と母とも能相談して疾御入来があればよいと無念を
こらへて居ました【源】「流石は左衛門が妹程あつて天晴く今
言通り其方等親子が首尾能本意をとげたにもせよ臆病
未練の源の助女の手を借敵を討しと世に沙汰さるゝ其時は
本領安堵は扱置て一所懸命の地も賜はるゝとは有まじく
討ぬが却て其方の忠義シテ昨日十三殿とやらは帰つた限で九重

(中・3ウ)

太夫の身受もしらずか【哥】「アイ此四五日は此郭に居続てお在
のが昨日に限つて五條とか大仏とかへお往被成急なことで太夫
さんもいつそ氣をもんで。せめて一ト目逢たいと被仰て側に見
て吾儕迄貰ひ泣をいたしました左様して是をあけて呉ろ
とお文が参りました其お文さへ落つて書隙もない俄の身請
【母】「貴君も【源】「明日お入来なら嘸びツくり被成ませう【源】「夫
と是とは違わうが身の薄命に引くらべ十三郎さんの心の内も
おもひやられて涙が出る左様して十三さんは全体どういふ身

(中・4才)

分の仁だネ【哥】「委敷ことは存ませんが以前は京家の御典薬とや
らをお勤被成御子息だとか申ことどうしたわけか十さんが幼児
時にお家が潰れ続て御両親もお亡り舅さんに引とられて
医者道の御修行被成内風と太夫様に馴染て宅も明れば
お金も遣ひ此頃では御勘当ト申事【源】「夫はくゝ氣の毒千万
寄も障も因果同土【母】「併お哥が申通り夜明てから大坂へ
お越あつても女連のことではありあちらこちらを見物して左様急々
にもお立には成升まい尊君様にも嘸お勞未夜明には間も有は

(中・4ウ)

暫時なりともお寐ませぬ敷【源】「なる程自己は兎もあれお前方
も宵からの立通しては嘸御難儀自己も大事を抱る体夜道は
いはゆるぼうこひやうがの勇そんなら夜の明る迄御夜界に預かるう
【哥】「実正に夫が宜ムリ升」とお哥は何かいそくと箆持手も
軽く〜と素より狭き家なればお歌を中に両脇へ母と源の助
が床を敷【哥】「寔にせまうムリ升から嘸御窮屈て被為入ませう」
【母】「せめて吾儕の床でも此方へはなして敷ませう【源】「窮屈かいつそ
よいではないか【母】「でもあまりあきが取ませんから【哥】「夫ぢやア御免

*老の坂↓おいの坂：さまさまの苦難に耐えながら次第に年老っていくことを坂
を上るのたとえていう語。『日国』

*ぼうこひやうが↓暴虎馮河：虎を素手で打ち、また、徒歩で大河を渡る意で、血
氣の勇にはやること。無謀の行為をする。『日国』

(中・5才)

こうむつて是で伏りませう 尊君もお休み遊せな【源】「サア〜お休み
ドレ〜自己も伏ろう」と三人は其場へ伏伏しが疾晩近き
頃なりけん「何卒爰をお明遊して下さいまし」跡から追
手のかゝり升ものどうぞお明遊して「トいふ声耳に入れば

源の助は。ツト起出【源】「女の声のようではあるが追手が。かゝる
身の上とはどういふわけだかト通り呼入て聞てやろう」と
掛鉄はづして門を明。月のあかりに顔見あはせ【源】「ヤ左様
いふそなたはお梅じやアないか【梅】「貴君は源の助様 どうして

(中・5ウ・絵)

源の助

(中・6才・絵)

おうた

(中・6ウ)

此所に【源】「是には段々〜子細のあること 併爰で咄しも出来にくい
マア〜此方へおあがり【梅】夫ではあがつても宜ざる升か【源】「宜ども〜」
ト夫よりお梅を上へあげ門の戸しめてもの座につき【源】「自己より
は此夜更にどうしてお前は此所へ〜」【梅】「サア尊君がお家出遊してしか〜
ケ様」と大仁お牧が密会の場に至りしことより跡をしたふて
家出せしこと有し次第を物語【梅】「島原と被仰たを心便りに
来は来ても追手のかゝるに心せかれおもはずたよつた此家で

お目にかゝるも尽せぬ御縁さうして敵の有家はどういたし」

(中・7才)

【源】「俄に敵は旅立して大坂へ往たとやら跡追欠ては思ツたが
深夜といひ道のりも余ツ程送れた様子 翼なくては夜の内
に追付こととはなるまいといふに是非なく一宿して翌は未明に大坂

へ往つもり【梅】「夫は〜嘸御残念にも思召ませうが夫は大かた天
皇様が夫婦諸共敵を討と被仰ことでムりませう 何卒吾儕も
御一所にお連被成て被下まし【源】「侍が仇討に女を連るは本意に
あらねど左様いふわけで家出をしたお前を爰から帰したら又大仁
やお牧さんがどんなことをするかもしれぬ 仁は何とも言はゞいへ夜が

(中・7ウ)

明たら大坂へ二所往つ【梅】「そなたらノ五儕を【源】「左様サ【梅】「ア、嬉
しい 夫でこそお跡をばしたつて出た甲斐もあるといふもの【源】「最う
夜明には間も有まい。なんならそろ〜出かけやうか【梅】「いかに夜か短
いとて未だ夜明ではござぬ升まい【源】「併今から寐たら寐過そう〜
【梅】「いゝへ能時分には吾儕がお起し申ませうからマア〜お休み遊せ
な【源】「そんなら寐ようか【ト】「伊前のお梅【源】「併お前の床がないぜ
【梅】「左様ならお邪魔でも貴君のお梅へ【源】「イヤ〜【梅】「何卒お否
はしれており升ト【源】「アハハ、褌しやア否たといを〜【梅】「宜ぎ〜
(中・8才)
升夫じやアお畳の上へでもふせり升【源】「何も畳の上へ寐す

ともいゝじやアないか」【梅】「夫でも襦のはうても否だと被仰升
ものを【源】「お前も余ッ程わからずやだネ 襦の方しやア否だから
此中へお這入といふことよ」とお梅の手をもて引よすれば引れ
ながらに姫蕙の紅さす眼もとを袖もて覆ひ其身を。ひ

たと寄添ば男もやをら手を延てお梅が帯を引ほどき
自己が帯もかいやり捨咄し声さへかすかにて後は無言と成にけり
第四回

(中・8ウ)

【源】「やお前はお哥さん」【哥】「貴君は若旦那」【源】「そんなら今のはアノ夢
で」【歌】「そんなら貴君が手を出して吾儕を引張たのはアノ夢
を御覧じたので有升か」【源】「十二夢じやア。ナニおつな夢を見た
言たのヨ」【哥】「イ、エ左様では有ません 尊君は能ウくお寐でも何
だか吾儕は寐られませず尊君の寐顔にうつかりとお見惚
申て居りましたらさもお嬉しさうな顔を被成てにこ〜笑つて被為入
たと思ふと間もなく手を出して吾儕の手をお引被成から竟己惚
で吾儕が思つて居るのが貴君に通じたのかと其時の嬉しさと今の

(中・9オ)

嬉しいので未胸がどき〜して居升 是も矢ッ張日頃から
及ばぬ願ひも御利益で叶ふようにと神々様へお願ひ申
た其お蔭と思つて居るのに左様ではなく何所かのお方を
夢に見て其仁の氣でナン被成ツたのでございませう」ト赤心
見へたるお哥が詞夢にお梅が門の戸を叩し杯と語もせず

増てお梅と思ひ違ひ不慮の門に入たりとはおくびにすらも出し
がたく嗚呼自己ながら浅ましくさはとて夢のごとくならお梅
も道路にさまよはんと嗟歎なすことしば〜なれば【哥】「何をそん

(中・9ウ)

なにふさいてお出被成のですへ 大かた貴君の氣じやるとんだことを
致たと梅で在被成でせう【源】「能種ンなことをいふヨ」【哥】「夫だ
つて貴君はいつそふさいてお在被成じやる有ませんか」【源】「何も
黙然やるしないか 遠くて近きは男女の間と枕の舐紙にも
ある通り眼前敵を持たながらお前と斯云情合になると云も
不思議なものだと左様思つて考へて居るのヨ」【哥】「併翌日にも
首尾能敵をお討被成ば尊君は素の鳴野の御郡司 亦吾儕は
素性賤しい松原づれの妹 殊に今では歌妓勤 お側近くの

(中・10オ)

ご奉公も成升まいと今ツから夫が苦勞でムリ升」【源】「其事
なら案じる及ばぬ 斯いふことのない時から作左衛門が忠義に換
おもふ男も有ならば添て兄が名跡を立させやうと

思ツた所斯いふ情合になつて見れば此世は愚 前の世もなに
しに側をはなすものかナ」【哥】「アレマアあんな嘘ばつかり」と口に

*遠くて近きは男女の間：能因本枕草子百七十一段に「遠くて近きもの 極楽 舟
の路 男女の仲。三卷本枕草子は「人の中」。(本文は田中重太郎『枕冊子全注釈三』
角川書店1978より)

はいへど心には千万無量の喜びなるべし

孝道義胆の源の助 大事の前に夢なればとてなんぞ
狼りに淫せんや 亦お哥との新枕も戯場するり合巻に

(中・10ウ)

あるべき脚色にて事経たり 是しも當時を。うがつてふ
人情本といふべけんと或人此場を難ぜられしか彼の
楽しんで淫せずとの聖語は兎まれ角もあれせまき住居
に二八の嬢光といひし源も恥るばかり源の助 モン柳下
恵にあらざりせば虚しく鶏の声を聞べき お哥と夢の
転寐は孝子に余義なき小夜衣着するがゆへの蛇足
なりと苦しく其場を退れたり

案下再説彼大仁坊お梅を開まゝ置んには枕を高く

(中・11オ)

楽しみならずとお梅が跡を追来り大仏前にて漸追付【大】「ヤイ
お梅待【梅】「ハイ吾儕をお呼ば成は【大】「自己だ 大仁さんだ」ト聞て
びつくり折わるしと欠いださんとなしたるを大仁すかさず帯
引とらへ【大】「コレく何も逃出すには及ばない 怖いこともおそろしい
こともない お前を爰迄追欠たは他でもないが お杖どの、云には
お梅がア、して居るうちは何かにつけて邪魔になる 夫故乞食
を躰にとり婚禮の夜に恥をかゝせ夫婦諸とも追ひ出
さうと思つた所が大違ひ 併家出をして仕舞は子細もない

(中・11ウ)

が若万一源の助めに逢た時口外れちやア大変だから人を頼
で殺さうと云からイ、ヤ其役は自己が勤やうと請合つてお前の
跡を追かけたのは殺すのじやアね(助る所存)なんと深切
ものたろうトは云ものゝ魚心ありやア水心 自己のいふことを
ウント云やア及すなから力になつて源の助の有家も尋て
遣う 亦四の五のぬかすなら是非に及ばぬ 息の音留て
呉ずばなるめ、無言で居るのは不承知か コレサお梅ぼう。どう
だ【梅】「吾儕風情を夫程に被仰て被下はありかたいとも

(中・12オ)

嬉しいとも申そうやうもムりませぬが何卒其ことばかりは
お許しなざつて被下まし【大】「許とはそりやア何を【梅】「今尊君

*楽しんで淫せず：楽しんで居るが、節度を保つて度を過ぐすことがない。「淫す」
は、度が過ぎる、乱れる。「論語・八佾」の「子曰、閔雖樂而不淫、哀而不傷」
による。(『故事俗信ことわざ大辞典』)

*柳下恵：人名。中国春秋時代の魯の大夫。本名は展禽。字は季。柳下という所が
知行地で、恵と諡(おくりな)されたことからの称。賢人で度量が篤く、孟子に「聖
の和」と評された。直道を守つてみずからを失うことなく、寒女を衣で覆つてやっ
ても、国はそれをみだらな行為であると思わなかつたという(列女伝・弁通)。

『角川古語大辞典』

*小夜衣：(一)名。(一)身をおおう夜具。着物のような形で、大形で掛けるも
の。多く真綿がはいっている。(二)「新古今・釈教・一九六四」の「さらぬだ
に重きが上のさよごも」の和歌から)近世、密通する女をいう。間男(まおと
こ)する女。(『日国』。「余義」と「夜着」(小夜衣)をかける。

の被仰おこつるこそを【大】「抱だれて寐ねるのが否いなたといふのか【梅】「ハイ」【大】「不ふ見みにと
言いやア是非せいひがない コレ見みさしし闇やみにも光ひかる小脇こわき差さ おぬしが
かはいゝ胴腹どうばらへお見舞みまひ申まをが夫つまでも否いなか」トお梅おめが眼先めまきへ
一刀いちぼうを突つつけられてわな／＼ふるへ【梅】「どうぞお助たすけ被ま成なて
被ま下くだましアレヨ／＼」と声こゑたつれば【大】「コレサ声こゑを立たると痛いた目め
をせにやアならぬが夫つまよりやア跡あとのへるものじやアなし 胴どうツ腹はらへ

(中・12ウ)

風穴かざあなを明あけられるよりやア明あてる穴あなへ先まも刃はもねへ。この
棒ぼうを突つ込こまほが夫つまほどに痛いたみもせずまんだらなるい
氣き持もちもあるめへと思おもふが夫つまとも風穴かざあなの方がいゝのか コレお梅
エ、も口くちが酔よくなるわい【梅】「殺ころさるゝのもいとひませず 亦またお心に
したがふのも否いなと申まをではムりませぬが源げんの助すけにめぐり逢あつて
唯ただつた一ひとト言こと申まを迄まで御ご堪かん忍にん遊あそびませ 夫おつとに逢あつた其上あなでは貴あなた君きみ
のお宅たくへ參まつてなり命いのち召よすともお心にしがふとも夫つまこそ
貴あなた君きみの思おも召よす次第しだい 何どう卒そつお慈じ悲ひに些すこの間あひだ【大】「コレサ／＼

(中・13オ)

馬鹿ばかも休やすみ／＼言いが／＼ 良てい人じんに巡めぐり逢あつてから自己おれを尋たずねて
抱だれ寝ねるとなんば長者ちやうじやうの讓あかさんでもほんやり方がチト烈はげしい
今いま時ときそんな云いふ艸くさを赤あかきも左さ様さまかと聞きてるものか 不得ふと心しん
なら是非せいひがない 足あし手てをしばつて思おもふ存ぞん分ぶん荒あ淫いんだ其その
上うで息いきの音ね止とまる兩りやう点てん張ちやう こんな療りやう治ちがしたくなさに
優いしく言いやア附つけあがるしぶとい女め」と云いさまに手て拭ぬぐ取とて

猿さる轡わ お梅おめが腰こし帯おび引ひほどき高たか手て小こ手てにいましめて其その俣は
大地ちちへ押お倒たしすでに斯かうよと見みへたる折せから足あし音ね高たか

(中・13ウ・絵)

升しやう二に／＼ほろ

(中・14オ・絵)

醉すいに／＼若わかう／＼なる／＼氣きや／＼おほろ／＼月つき

(中・14ウ)

く来る者ものあり コハ折お折おわるしと大だい仁にはお梅おめを其その場ばに捨す
置おていづくともなく逃に去きけり 是こゝへ来きかゝる其人そのひとは別べつ
人ひとならず長ちやう者じやうが甥せうたる重じゆう三さん郎らう 今いま一人ひとりは重じゆう三さんが朋とも友ゆう
飯い沼ぬま要かなめ人ひとと呼よびなす武ぶ士し お梅おめが側そばへづか／＼寄よ小こ提てい灯とう
の明あかりにて右みぎ見み左ひだり見みして重じゆう三さんはびつくり【重】「左ひだり様さまいふお前は
お梅おめさんじやアないか」ト【大】「貴あなたならぬと云いはせよ」と【梅】「ヲヤ尊あなた君きみは重じゆう三さん郎らう
様さま お恥はかしくムり升しやう」ト【大】「いひけしと云いはせよ」と【重】「夜よ更よといひ殊ことに此こゝ
形かたち定さだめし子こ細このあることだらう 此こゝお仁には自己おれの朋とも友ゆう 何なににも

(中・15オ)

遠とほ慮りな仁にではない どんな理わけ屈げでも隠かくさずに咄はなしてお聞きせ
【要】「そんなら此このお嬢ぢやうがかね／＼お噂うわさに承うけたまわつた長ちやう者じやうの御ご息いき女むすめ
何なににもせよ御ご難なん儀ぎの様よう子こ自己おれが宅たくとても遠とほくもない所ところ道みち
中ちゆうで咄はなしもなるまい 何なには兎うもあれ自己おれが宅たくへ【重】「夜よ中ちゆう

いひお気の毒ながら夫じやア左様願ひませうヤレ／＼着物も何も泥だらけた【梅】「宜所へ重三さんが被らして是が地獄で仏とやらでふりませう 併貴君へはどんだ御夜界【要】「決してそんな御心配を被成ツちやアいけない 其替り重三さんが御存だが女房

(中・15ウ)

のない宅だから今時分は湯も茶も沸ちやア居ますめへ」ト是より件の要人が家へお梅を伴ひ今宵の爲体を尋ねしに重三郎は勘当の身なる故源の助がことも知べからずト先源の助といふ良人を持たることをはじめ源の助が家出の條お牧大仁の密會都て今宵ありしこ落ものこらず

物がたれば【重】「天じやア其源の助といふ仁は嶋原へ敵討に往つたといふのかハテネ【要】「貴君が先刻お咄しの若衆といふのがもしお梅さんのお躰ちやアないかね【重】「多分夫に違ひムり升まい

(中・16オ)

アノお梅さんお前の誓の源の助さんといふ仁は年の頃十七八色白な鼻筋の通つた口もとの可愛らしい物言の涼やかな仁だろ【梅】「ハイいつ貴君はお逢でムりました【重】「今日昼過に嶋原で一寸お目にかゝつたがなる程あれちやア恋煩ひも無理はない【要】「重さんの誉るくらゐぢやア余ほどうつくしいと見ゆるネ【重】「実に絶世の美人といふのはあれらのことだらう【要】「薄くは薄にも聞てゐましたが鳴野の佐々木の若殿が馴の果とは気がつかなんだ 夫ぢやア重さん此方も僥倖互に目ざすは帯大尽殊に

(中・16ウ)

よつたら源の助殿の助太刀をして【重】「なる程此方は唯女敵先方は名にしあふ俱不載天の仇敵【梅】「夫では尊君がたも矢ッ張其帯とやらを【重】「殺すほどの意恨もないが京遊学の其時から風と嶋原の九重太夫といふ者に馴染多くの金を遣ひ捨果はお前も知つての通り剪さんに勘当され大かたは此要人さんのお世話をうけて暮して居るが此頃其太夫の所へ帯大尽とかいふ奴が茂／＼通つて昼夜の揚話 其上ならず近くに身うけするとの風聞ゆへ此要人さんをお頼

(中・17オ)

申シ太夫を盗むか帯を殺すか二ツひとつに島原へ取て返す途中にてはからずお前の難儀を救ふといふのも不思議のちなみ【梅】「そんなら貴君も嶋原へお往なさつて帯とやらを殊によつたら殺さうと被仰のでムりますか 左様ならへ吾儕もお連被成て下さいまし 良人につらなる仇敵 せめて一ト太刀【要】「なる程夫も至極道理 侍が仇討に女を連ぬといはれたは源の助殿の義心さもあるべし 自己も帯刀なす身にてよしなきことに力を添女を盗出さんこと実本意には

(中・17ウ)

なければも太夫も帯とやらに身受されなば生て居ぬとか聞上に彼帯とかいふ奴も素性のしれぬ曲者と聞たる故に

重三さんに力を添出かゝる途中でお前に逢はずぱりしれた帯の素性、自己等に連立て往にはまさか源の助さんも夫でもわるいと被仰もしまひ」【重】「殊には源の助さんが朝比奈張飛の勇があつても多勢に一人では勝利の程も覚束ない共に力を添よう」と聞てお梅の喜びは何にたとへんものもなく猶種々〜と談合うち疾鷄鳴の告わたるにおどろきて三人は

(中・18才)

いそぎで支度をなし嶋原へこそ往たりけり

作者曰

源の助がお哥の方へ至りたるとお梅が大仁に逢たる

とは同夜のことにて一時あまり送れたらん歎 這は申

さずともしろしめさんが童幼兒女にはまどひにならん

と余紙あるまゝにするし置ぬ

鶯塚千代迺初声三編中の巻終

(下・1才)

鶯塚千代迺初声三編巻の下

江戸 山々亭有人編次

第五回

明烏てふ唱歌にいへる契情に真実ないとは理解しらぬとは能情態を穿に足れり 思ふは貧に思はぬは富 野暮に実あり粹に実なくたま〜粹に実あれば内証でせて逢こと難く実にあれど契情に増ものあらん彼

九重は心ならず帯大尽に根引され夫さへ俄のことなれば

(下・1ウ)

重三郎に逢よしなく文はお哥に事伝しが夫さへ人に

いそがれておもふ七分は書のこし袖は日毎に沖の石人こそ

しらねかかく間も泣あかしたる憂思ひ 折柄障子そと明て

入来る主人帯大尽【帯】「コレ太夫 またしてもふさぐのか実、気

にもなるぜ 重三とかいふ奴のことをいひ迄くず〜思つて居ても

おしまらね〜自己も名におふ其以前は加賀の国富樫左衛門が

重役源太左衛門と云れては他領はしらず 加賀一國では飛鳥も

落す勢い 鎌倉の主用をを兼京在勤の其うちにおぬしの

(下・2才)

色香に風与まよひ殿の金を遣ひすこしとう〜所領を召

あげられ不自由こそせね浪人となつたは皆なおぬしのお蔭 併

斯いふとなんだか愚智に聞へるが二年あまりの揚話に帯

*朝比奈一朝比奈義秀：鎌倉前期の武将。和田義盛の子。母は巴御前といわれる。

通称三郎。勇猛、かつ豪力無双と伝えられ、能、狂言のほか、「岸姫松壽鑑」(き

しのひめまつくつ)など戯曲、小説、舞踊の題材にされた。生没年未詳。(『日国』

〈さずりびき〉)など戯曲、小説、舞踊の題材にされた。生没年未詳。(『日国』

*袖は日毎に沖の石〜「我そではしほひにみえぬをきの石の人こそしらねかかく

まぞなき(私の袖は、引き潮の時にも見えない沖の石のように、思ふ人は知らない

いでしやうが涙に濡れて乾く間とありませんよ)。(『新日本古典文学大系 千

載和歌集』恋2・760・二条院讃岐)

紐解は扱置て優しいこと葉も掛はせず意氣地を張が契情の常でも今は素人お哥をはじめ幫間末社に大坂の庫屋敷と言触したれば今時分は大坂三界尋ねあくみ意氣

な情合でもして居る時分そんな男に情合を立すと自己の心根も些は察して呉たつてまんざら罰もあたるめへ【九】「成程

(下・2ウ)

二年此かためしのお蔭で紋日物日の苦勞もせず太夫さんとか九重さんとか押も押れもしませぬのは片時でも忘れませんがくどもぬしに咄す通り重三さんは突出しの其始から世話になり他には客衆もないこと故此人ならば未始終と前後見すの了簡から今考へると馬鹿らしい他の男に肌はふれぬとおそろしい御願をかけ左様するうちに重さんも勘当の身とおなりなされ世にある時はいひかはしても勘当の身となつたから立た誓ひも不古にして襟元に附のかと積られるのも恥かしく勿体ない程

(下・3オ)

実のあるお前はんさへも袖にして濟ないこととは思つても今さら誓ひも破られず夫故身請も再応お断り申ても武士の意地づく言出して跡へは引ぬと俄の身請金の生木のある人でも続くまいと思ふ程吾儕故の御散財初手からぬしが来さつしたら重三さんに惚もせず野暮な誓ひも立まいに今さら言ても跡の祭只何事も因縁づくと何卒おもひあきらめて言出してもお呉んなんすないつそ持病に障り升【帯】「何

だと初手から自己が来たならば重三にも惚ぬとか又世に在時は

(下・3ウ)

誓ひを立澤涸たから破られぬとは流石は九重太夫おもしろいさほどに意氣地を立るなら其身故に伝来の知行を失ひ家名をたやし浮浪人となつた源太左衛門不便とおはぬぬかイヤサ可愛さうとは存せぬか濡れぬ先こそ露をもうとへ君契情となつた身が一夜ぐらゐは抱れて寐でも神も御罰は當まいに心強いが意氣地でもあるめへ併太夫さほどに否なら暇もやろう重三とやらにも添せてやろうその替り今夜一ト晩抱れて寐たら翌旦は重三の所迄人をつけて

(下・4オ)

送らせやう夫でも否なら是非がないたとへ足手を縛つても抱て寐ずにやアモウ置ねへ正根をすへて返回を聞かうトのつ引させぬ手詰の詞九重今はのがる術なく【九】「夫ほど迄に被仰ものなんの否が有ませう此身に罰が当らばあたれ立し誓ひも今日限り【帯】「そんならいよ【帯】「アレ今は人目が【帯】「たとへ人目があるうとも夫婦のかために遠慮がいろいろか【九】「夫でも吾儕やア此屋中【此時うろたへ】「へい先生庄屋から急病人があると申て参りました【帯】「エ、氣の利ぬ病人ぢやア

*紋日物日↓もんびものび…江戸時代の遊里における特別の日である、紋日と物日の並称。「紋日」は「物日」の変化した語とされ、本来両者は同義であるが、両者を並べて遊里の特別な祝いの日をいうことが多い。『日国』

(下・4ウ)

ねへか 夫ぢやア九重かならず晩には【一九】「寐間温めて待ており升」
【帯】「丸鬘に結た所は亦格別美しいぜ」ト彼の九重を尻
目に見なし病家へこそは往行けれ

抑 帯大戻といへる者は素富樫の藩たりしが民を

しいたげ公役を増種々の奸曲露顕なし終に浮浪の

身となりしが大井川にて河内の源太左衛門を手に掛若干

の宝を奪ひ終には賊の首領となりて近江国多賀の山

中に家居をしつらひより〳〵都に出て旅人をはぎ庫

(下・5才)

を破りて財を奪ひしかれと彼に不思議の術あり

其昔信濃国塩尻の山中にて異人の手より医道

の秘密をしるしたる一卷を得てけるが実に其業

凡医の遠く及ぼざるをもて此七を乞ふ者些からず

故に表面は医と号し内に左道の業あるをもて其

身宝に欠所なければ其名を帯と換名して彼九重

を根引なし我隨家へは伴ひしなり

跡見送りて九重は吐息トともに独言世に薄命な人

(下・5ウ)

達も多い中にも吾儕程因果な者があろうぞや 三ツの時
時に男親にわかれ貧しい母の養育で成長となるうち
母の大病 年端もゆかぬ妹と看病高直薬を吞せずば

母が命も危しと聞て苦界に身をしづめ薬の奇特

に御全快被成たなれど御病氣あけく實仕事さへまゝ

ならず 貧しい暮しも重三さんが世にあるうちは母様や妹

にまで息をつけて是を春着にこれをまた更衣にと

折〳〵はやさしい文迄やつた故失礼ながら此母はよい智取

(下・6才)

た心持やがて其方も年明たら先方へ往やるか亦別に

宅を持かはしらないが今から夫が楽しみぢやとよろこんで

ごさんす所へ斯いふ所に請出され思はぬ仁の世話になつて

居ると聞たら母さんも嘸びつくり被成せう 夫はさうと一寸

延ればひろ延ると退れては置たものゝ今にも帰つて来た

ならば最う言分解も聞まいといふものゝ今さら操を破つて

はアノ世でお目にかゝつてもナニ言わけがあるべきぞ 請出さるゝ

其日から生きて居ぬのは覚悟の上 今日迄命を存生たはせめて

(下・6ウ・絵)

九重太夫

(下・7才・絵)

朝兎や／思へは／永き／花の露／梅年

(下・7ウ)

最一度母さんや重三さんに逢たいばかり今死ぬる身は

いとねど母さまは御存なくもう来年は年明ゆへ一度在所へ戻つて来るかすぐに重三さんの所へ往呼によこす。どうするかと朝に晩に指を折り目を算へて待てど。

あろう モシ其中へ吾儕の愛へ来たこと歟 死んだことでも聞へたらさぞや力を落さんして亦わづらひでも出ようかと おもへばいつそ死ともない 一度此所を忍び出て在所へ往つて母さんにお目にかゝつた其うへで死ぬるとも遅い事はない

(下・8ウ)

左様ぢや〜と身支度せしがイヤ〜踏も習はぬこの山道跡から追手をかけられて其時愛目を見るよりは今死だのがはるか増 若や我亡其後は在所をたづねて妹を吾儕と思ひ末長く可愛がつてとお哥さんの所迄文には

かいてあげたものゝ言のこしたこともありせめて一ト筆とおもへども人家はなれし此山中 雁の翼の其他はこと伝たのむ人もなし いかゞはせん 暫時は思案に着て居たりしが兎にも角にも重三さんの一トまづ在所の母さんを尋て

(下・8ウ)

往は必定なればよし 母様のお歎ありとも在所へ一ト筆送るには死だ跡にて帯さんが開封したとて子細もなし 重さんへの書置ならよも届けては呉まいが母さんへの文ならばよもや届けて呉さうなもの。さうぢや〜と手ばやくも文したゝめて上書なし 帯大尺へも一通の書置なして夕つづる鳥

におどろき身支度なし諸行無常と撞かねや西に入日と諸共に弥陀の浄土へ 導給へねがふは良人重三さん此世は妹と和合お暮し遊ばして千万年の御壽命すぎ

(下・9ウ)

未来は添してたべ給へ 南無阿弥陀仏〜と西に向ひて手をあはせやをら懐剣逆手に取廿二才を一期にてあはれ果敢なくなりにはいたしましたしな中〜につたなき筆には書ことあたはじ

第六回

神風の伊勢の駅路の追分に往來の人の休ふなる掛茶屋ありて此店の茶を汲嬢は年の頃二八の上を漸二ツ越か越路の白雪も恥るばかりの仇嬢 汲出す茶は些とも溢るゝごとき

(下・9ウ)

愛敬に客の絶間ぞなかりける 今しも休ふ旅人が【▲】「イヤ相替らず美くしい 慈母は達者かの」【嬢】「ハイ難有ござあ升 此頃は大きに丈夫になりました 昨晩は関宿でムリ升たか」【▲】「イヤ 四日市乗をするつもりで坂の下から七ツ立サ」【嬢】「夫はお疾、こでムリ升 夫じやア今夜は宮の紀の国屋か桔梗屋で定めておなじみが待てゝムリ升」

【▲】「イヤそんな景気も昔は有たが年を取ちやアおやまより按摩さんが楽しみだ」【嬢】「お前さんは其気でも契情が打捨て置升まい」【▲】「打捨て置ぬといへば向ふからゑらい美くしいのがやつて来た

(下・10才)

娘も多し代呂物だが男は兄だか良人たかよい男も世の中にあれば有ものコレお八重ぼう何をそんなに見惚るのだト咄し半へ件の兩人「ト物がお尋申たうムリ升」▲「それくお八重さん来たせく」▲「ハイ何をおたづね被成升」▲「日永の在とやらに百姓の源藏とやら申仁がムリ升か」▲「ハイ源藏といふ仁は二人ムリ升がト答へる娘の顔かたち死ば一所と誓ひたる九重太夫に生写し他人の空似といふことも世になき事ではなけれどもしやこれが妹のお八重にてはあらざるかと思へどつかつに夫ぞとも云出し兼て

(下・10才)

手をもしながら【重】「自己どもが尋升源藏といふ仁は今世になき仁でたしか慈母と娘と二人で暮してゐるとか聞きました」ト聞て娘は不審暗ず【八】「夫では此松並木を通り越と橋がムリ升其橋を渡つて右へ曲り一二丁も往てお尋成ば直にしれ升が貴君方は何方から」【重】「自己共は京の者」と聞てお八重は是ぞ彼姉が良人と頼たる重三郎にてありつらん

(下・11才)

いふともつやぐ恥かしからず姉が臨終の手簡にも吾亡後は彼人を良人と思ひ大切に和合せよとのことながら連の女中のうつくしき御兄弟ではよもあるまじト傍界怪気も惚た情

(下・11才)

といふ当もなし殊には敵の帯大尺に巡り逢ても顔もしらずいはゞ陰を握やうな探もの源の助さんも今頃は嘸難義をして居るだろ」【梅】「夫につけても九重さんいとしい尊君に引別れおもはぬ仁に請出されて嘸口惜ことだらけでムリませう」【重】「お歌の所への置手紙では死んだとおもひあきらめて妹と添つて呉とのこと左様して見りやア真底から帯に体をまかせぬ気か夫とも死んで仕舞気歟在所の慈母をたづねたら何かの様子も分解ヨ」ト咄しうちに縄手も越橋も渡り

(下・12才)

て九重が老母の家にぞいたりける恁てお八重は重三郎が見へずなる迄行蔭を見つゝ見惚て手に持し茶台をはたと落しければ旅人は可笑く背中を叩き▲「コレお八重ぼうきつい夢中になりやうだの今聞た源藏といふ人はたしかお前の親父ではないか」▲「ハイ親父は源藏と申升」▲「コレサまた延あがるか。いくらお前が廻つたとて美しい女中同道だとへにもいふ旅は道連夜は情夫より何所こにも差合のない

好男子 自己ではないかぬか不承知歟」トお八重が腰へ抱つけば

(下・12ウ・絵)

重三郎

お梅

(下・13才・絵)

お八重

(下・13ウ)

【八】「エ、モそんな建気ぢやア有ません」ト「旅人の手先」【▲】「アイタ、ゝゝゝ、ゝゝゝ
ことをする奴しや」【八】「モウ見世も仕舞升 疾お立なされまし
最うそちこち午刻過 出船の間にはあひませぬぞ」トとつ
かは。そこら片付けて茶見世を近所の人に頼み自己が家へ
いきせきと帰れば母は立いで、【母】「ヲ、能帰ッてお在ネ 今自己と
代ッて迎ひに往うと思ッた所 見世は誰ぞに頼んでお在か」【八】「アイ
新田の菊さんに一寸頼んで参りました」【母】「菊さんならば些ぐらゐ
間があつても宜う」トお八重が耳に口をよせ何やらささやく

(下・14才)

【お梅】「これ重三郎か」【お梅】「ヲヤ左様かへ なんだか聞かわるいね」【母】「子二間のわらひ
事があるものか サア御挨拶を申な」【八】「アノ 慈母さん 先刻見世で
宅をお聞被成た女中連のお仁に違ひなかつと思ひ升
が夫とお一人か」【母】「ナニお兩人連サ」【八】「アノお連はお妹子でもある

のかへ」【母】「未だお入来があつたばかりで委敷お咄しも聞ないが儘
從弟だどが」【八】「エ、從弟だどへ」【母】「サア、アノ、娘子も可愛さうに十七や
十八で御良人の跡を尋るのだとかいふこと 何にしても此方へ来て
御挨拶を申な」ト母の進めに何となくおもはゆきまゝ、両手を

(下・14ウ)

突ば【母】「是が九重の妹八重と申不調法もの」ト母のこと葉の
尾につきて【八】「此末ともにお目かけられて、も口のうち顔に紅葉
を照らしッ、さしうつむけば【重】「コレハ、先程は途中でお目にかゝれど
お八重さんともしらぬ故大きに失礼いたしました 是は」【お梅に】「自己
の從弟 子細は荒増慈母さんにお咄しを致しかけた所」ト
是より源の助が家出の條 大仏前にてお梅の危難を救ひし
こと 夫よりお哥が許にいたりしに俄に九重も身請となり源の助にも
逢ざること 夫より大坂を尋れども帯は素より源の助にも逢ざる

(下・15才)

ことの一伍一物がりたりて扱言やう
【重】「そこで慈母さんもお聞なせ、間違う時は違ふもので其くせ自己
も此嬢の良人の源の助といふ仁も其昼過から夕がた迄お歌と
いふ唄女の宅に居ただれど自己も帰り源の助様も帰つた跡で
俄の身請 直に源の助さんも取つて帰したが、一時ばかり違つたので
帯大尽は逃して仕舞自己共はひと足違ひで源の助さんには
逢さず仕舞 尤太夫も俄の身請といふことでお歌の所迄届いて
居たトいふ文は、則是さ」といひさま懐中より文とりいだして見せ

(下・15ウ)

たるにひらく間遅しと読かだし母は右左の返回さへ先立物は泪にてお梅の姿を見るにつけもしもや是が九重にて重三郎と連立て来るならいかに嬉しからんとあれを見足を見るにさへ何れ涙の種なるが斯であるべきことならねば重三郎に打向ひ【母】「無貴君にもびつくり被成ろうとぞんじ未だお咄しも致しませんが斯いふ文を貴君へも差あげて置からは廓を出る其時【また死ぬ覚悟でおりましたか不便なことをいたしました】ト

(下・16才)

から何とか沙汰が有ましたか【母】「コレお八重仏壇にある九重の書置。貴君へ一寸お目にかけな【八】「ハイ」と返事も軽くと立ど件の書置に彼のおかたと末長く和合暮せとあるをもて唯何となく恥かしく顔をそむけて見ぬふりも眼元に情を含せて重三が片辺にそと置けば待かねたりしおもうちにてよみくだすなる其文に

唯今わたくしのおり候所は帯大尽といふ人の住所を深くつゝみ候ゆへせめてはひとつの恩おくりと夫故住所も御しらせ申候 根引されたる其事も

(下・16ウ)

右のわけゆへ今日迄深くつゝみて御しらせ

不申候 あなかしこ

私事はおはもし様にも御ぞんじのごとく重三郎様と行末の御かたらひもいたし候へともおもふにまかせぬ勤の身俄に仇し候まらうどに根引されもうし候もとより道の柳にて風次第なる身なからも操とやらいふ事はつね／＼あなたも御おしえのごとくいさゝかわきまへをり候に付あたし男に肌だれては女子の道の立かたく今宵刃にふし申候 最う来る年のねん明

(下・17才)

ゆへひとまづ在所へ立もどり御機けんのよいお顔もおかみたくと朝ばんにたのしみくらせしかひもなふ先だつ不孝は幾重にも御ゆるし可下候 とうぞわたしのなきのちは妹お八重を彼のおかたと行末長く和合暮し候やう彼御かたも近／＼に在所に御出のあるはづゆへおまへ様より能く御咄し下され候 また妹にも操といふ事よく／＼御申聞可下候 わたくしはめいどの御ともじ様に御孝行いたし候 妹はあなたへ

(下・17ウ)

御孝行いたすやうにとくれ／＼も御申さとし可下候 また重三さんの御勘当ゆり素の御身にたち

*おはもし御は文字…恥ずかしいことの意の女房詞。『日国』

もどりありあつはれ天下に御名をあぐる名医と

御なり被成るゝやう艸葉のかけよりねんじ上〔まゐらせ候〕

言おく事もかざゝながらあの世の迎ひにいそかれ

てあらゝ書残し〔まゐらせ候〕かしこ

トよみし重三も側に見るお梅もともに貰ひ泣 母は小膝を
進ませて【母】「たらはぬがちの此お八重 御心には染ずとも亡

(下・18才)

九重への追善と思召れて行末長う御本妻には及ばず

とも何卒お側に【重】「コレハ〱御挨拶 お歌が所への置手

紙にもお八重さんど末長くと書てもあるし左様なくとも

孝貞全き九重の一腹の妹ならお前の方で不承知でも

好んで女房に貰ひ度」ト聞てお八重は飛立嬉しさ 母は

ほとゝ喜びて【母】「難有うぞんじ升 其詞を聞上は死んでも

おもひ置事はムりませぬ お八重そちも嬉しかろ ヲ、アノ嬉し

そうな顔つき。コレお八重仏壇へ灯明をあげてても モシ

(下・18才)

旦那様アレ御覽じろ 中の位牌が則九重 旦那寺へ

お願ひ申戒名を頂て置ました 御線香なりお花なり

手向て遣つて被下まし 貴君が手向る線香は千部万部の

経よりはアノ嬢の為に宜回向」トいふに重三もさらばとて仏間

に向ひ香を焚読 経果て夕飯をとゝのひ猶四方八方の

物がたりに暫時は愛をなくさめけり

鶯塚千代迺初声三編下

(上・1才)

鶯 墳千代の初声四編序

春雨の眠気を覚す御伽紙に先人

松亭金水大人此一編を綴られしが

そも〱これが原本は羽風に匂ふ梅か香

ならで其名は四方に芳しき菊川宿

なる鬼卵のぬしが世にゆるされし

(上・1才)

妙案なればしつほりぬるゝ濡の場も鶯に

この辛子酢と晋子が吟ぜし愁傷も身

俣気まゝの筆頭自在 爾を粹書に

うつされし金水ぬしも流石復老鶯の

年の功いたましきを彼主も経読鳥の

数に入齋まだ黄なる僕が書房の

(上・1才)

夜飼に買込れ声音を似よとうながされ

ヲツト承知と鎗うめの稿半継て満尾に

*経読鳥：(鳴く声が法華経と聞えるところから)鳥「うぐいす(鶯)の異名(《季・

春》(《日国》)

赴れと鶯宿梅のそれならでいともかし

こき佳作の編次原書に違ふ場処

ありととがめ給はゞいかゞ答へん

「明治ふたつとし梅鳴頃春雨そほふる灯下に」山々亭有人記(印)

(上・口2ウ・絵)

長者の娘お梅／源左衛門が／本妻と／なりて／梅が枝

源之助／旧領／案緒／とし名を更て／佐々木／源太／左衛／門

(上・口3オ・絵)

うれ／しきを／むかしは／袖につゝみけり／今宵は／身にも／あまり／

ぬる／かな

松原作左衛門が一度／歌妓に投ぜしも後側室となりてお歌

(上・口3ウ・絵)

近江高宮の医師／左枝重三郎

ふしておもひ／起ても／身にや／あまるらん／今夜の春の／袖の／せま

さに

(上・口4オ・絵)

九重太夫が妹／重三郎が／妻となり お八重

(上・口4ウ・広告)

鶯塚千代迺初声

四編揃大尾

松亭金水著／山々亭有人補綴／孟齋芳虎画／文永堂寿梓

鶯の声／なかりせば／雪消ぬ／山里いかで／春を／しらまし

(上・1オ)

鶯塚千代迺初声四編上巻

東都 山々亭有人編次

第老回

【▲】「お慈母久しう逢ませぬが御病人は些少づゝも快方かの」

【母】「誰方かぞんじたら久兵衛様 快方と申度が日増に

重るばかり故寔に心痛いたし升」【久】「夫はそのはづ 自己

も此間商内用で掛川迄往つて来たが先方の主人も

此方の客人と同様に手足のしびれる難病で三年

(上・1ウ)

以来臥て居たを随竜軒といふ御名医秋葉あたりに

世をしのんでむざと病家は見舞ぬ気な手づるを

求めて其お仁の葉を吞むと忽ちに駿か見へて二夕

廻り過か過ぬ其うちに全快して此頃は原の膝に成た

といふ咄し故其方衆親子の勞苦するを推しやられて

其葉を練葉にして貰つて来た 相不応もあるかしら

ぬが此練葉を吞て覽なされ」【母】「夫は／＼御心切に難有う

ぞんじます 早速頂せて見ませう」といそ／＼として押戴ぐを

(上・2才)

【久】「若夫で験が見へた様ならば手紙で掛川迄左様言て遣れば速にも跡を送すつもりお八重嬢にも宜敷とつかわ帰り往跡を母は見送り件の練葉押いたゞきて【母】「コレお八重——ト呼にお八重は馳出て【八】「慈母さんお呼被成たか」【母】「重三殿はお臥てか」【八】「アイ今すや——と寐て居ます」【母】「今新田の久兵衛殿が見へられて此練葉は斯々と聞しごとく物語医道に委敷重三殿此練葉は呑ぬといわるゝかもしれぬが念に念を入られる久兵衛殿急度した

(上・2ウ)

手証を見届ねばうっかり葉の世話などは被成気づかひない仁が態々持つて来る支ゆへ利ぬにしても毒にはなるまい」【八】「たとへ呑ぬと被仰てもお梅さんと吾儕から能々お進め申ませう」と彼の練葉を請とりて重三郎が病床に来り枕「屏風の上からそつと覗いてみるにすや——といまだ寐入て居たるゆへお梅に葉の所以を話白湯焚さんと涼爐の下をあふぎてゐたる折からにゴホン——と咳なせば【八】「ヤやお眼が覚ましたか」【重】「余ッほど寐た様か」【八】「イ、エ余ッ程といふ程でも

(上・3才)

有ませんがいつもよりお臥ました【重】「ア、つく、思へば世の中に自己程罪の深い者はあるまい親父は近郷近在に名を知られたる名医であつたが幼稚時から医道を嫌ひ

役にも立ぬ詩歌管弦能や謡に遊び暮し所詮是では家相統覚束ないと勘当受たを伯父の長者が引取て京に登て修行をさせ人の顔をも見返す様な名医になれよと異見された伯父が厚意も反古にして不図九重に迷ひ出し多の金は遣ひ棄騰句の果に九重もあたら

(上・3ウ)

盛りの花を散し年を重た慈母に逆さまごとを見せるのも皆んな儂から起つた事未だ其上にお梅さん迄世話になるのみならず四月餘りの此難病手足がぶる震ふ故医師も瘡の配剤が違つて今の此くろしきも不孝の罰や不義理の科よしない者と縁組してお前迄がいかい苦勞是を思へばいつその事死んだ方が増であらう」ト枕に顔を押あて、男泣にぞ泣居たり【八】「つまらない支をお言被成不斷姉様のお文にもそれは——信切なおやさしいお仁だと貴君の自慢が一度でも

(上・4才)

書けない事はありません其貴君に添れぬ日には死氣に於てるのは女の常貴君の科になりませう良人の病氣を女房が看病するのはあたり前何も其様にきな——と思ふ支はありません今も慈母さんが呼で此練葉は何病ひにも宜と云て久兵衛さんといふ仁が持てきて下さつたが貴君はお医者者の支ゆへに異体のしれぬ葉は呑ぬと被仰かもしれな

いとお進め申て是非呑ろと呉々との言附ゆへお心に染す

とも何卒あがつて被下まし」といへばお梅も其尾に附【梅】「折角

(上・4ウ・絵)

お八重

(上・5オ・絵)

重三郎

重三郎／お八重が／家に日を／かさねて／病に係る

(上・5ウ)

慈母さんも御心配 久兵衛さんとかいふ仁も遠々を持ってお

在の薬吞つてお覽」と俱々にすゝめる【重】「夫りや吞る所ぢやア

ありません どうして／＼意にかけないぢやア掛川くだりから

斯しちや持て来られない ドレ其練薬をいたゞかうお八重白

湯をひとつおくれな【八】「ハイ」と返回て拔出す白湯諸ともに彼の

練薬吞むと夫よりひらきが附差込さへも落付て苦痛

もはたと忘るゝにぞ【重】「コリヤア不思議な薬だ 半剤ばかりも

吞と夫から気が晴々して胸先がとんと板の様に張て居たのが

(上・6オ)

お八重島渡さすつてみな 此様に綿のやうに成つて来た 僕

も医者の方に生れ多の薬を見聞もしたが如是寄代な

妙薬が世に有ろうとも思われぬ 左様してこりやア掛川の

どんな所から出るのだから委敷聞て貰ひ度【八】「なる程あんなに

張た胸先が見てはトンと不断の通り 薄気味のわるい程

利目があるぢやア有ませんか【梅】「アレ／＼些少の間に重さんの

顔つきの克おなりの支疾く慈母さんにお聞せならどん

なにかお喜びでござぬませう【八】「夫は左様と其薬は今も

(上・6ウ)

お咄し申通り伝手はなくては病家にも見舞てはくださらぬ

御医者様との支ゆへ宜塩梅にしれ／＼ばよいが」ト咄し半に

母お袖【袖】「あの練薬がめつきり利てお心持が快トやら 夫で

吾儕も安堵した モシ重三郎殿今もお八重が申す通り

手重御医者といふ支ながらお前様が御索被成縁由は

吾儕もぞんじて居るゆへ久兵衛殿に緯縁由を話たなれば

挾気なアノお仁竟聞てくれるは心竟 大船に乗た気で

疾う薬をあがられよ【重】「何からなに迄ありかたうぞんし升

(上・7オ)

御察しありしとあるからは今更申におよばねどかゝる寄薬を

秘したる良医是に便て道を学び夫を土産に勘當の

佗をして原の身分に立戻り親子の衆を引取てせめ

ては今の恩送りに薬がさせてあげたい」とほろりとこぼす

ひと雫 母は見てとり完爾と笑み【母】「其思召ばかりで沢山そん

な御心遣ひを被成ト矢ッ張御病気に障りませう 吾儕は

*ひらきが附／＼ひらきがつく…(2) 気が晴れる。また、気がつく。われにかえる。

【日国】

鳥渡久兵衛さんの所迄往つて何かの話しを致して来る程に
随分薬を精出して進るがよい」【重】「最う彼は黄昏ませうに

(上・7ウ)

態々御往被成らずと急ぐ度ではムリません」【母】「夫ばかりでなく
他に種々用事もあり暮たし所が村内ツイ往て参ります
御風邪でもひかぬ様に介巻を掛てあげ申な」【重】「他に御用が
あるならば是非もないが自己の支ならば今晚には限りませぬ」
【八】「イエ慈母さんも久兵衛さんには種々用度もあつてのこと
夫よりはお白湯も熱が附ました 最些お薬を召あがり
御気分が宜やうなら徒然艸の御講訳でも被成まし」【母】「ヲ、
夫がよい〜吾儕も久敷つれ〜を見ませぬがたしか百廿式段

(上・8オ)

當りに第一一人に人の学ぶべきは文の道 次には医術を習ふべし
身を養ひ人を助け忠孝の勤も医にあらざんば有べからず
とか書てありましたが尊きものは医の道と見へ升ヲホ、、、、
入らざる姥アの高慢らしいドリヤート走り往て来ませう」と出
行跡に重三郎お相が言し徒然の医術の徳と裏がへ
に身をも取す忠孝の勤に欠し身を悔て自己と僕に秋
の日のいと短く入相の鐘にあわれの弥増るお梅は側に
越方を思ひ廻せば我身程儂なき者が復老人有磯の

(上・8ウ)

海も尚浅き親の患も余所にして家出は做せど其人の生死も
更に不知火の心筑紫は水の泡吾家にさへ帰らぬ身の薄
命を打歎く憂を誘引て蝸の啼音に秋ぞ佗しかりけり

第二回

めぐり逢て見しや夫ともわかぬ間に雲を当なる帯大尺の
跡をしたふて源の助 唯蔵やしきと聞たを便りに難波
三界牽れど原より手謀の空言なれば所在ををしるべき
いはれなく仇し日数を経けるが手がかりとともあらざれば

(上・9オ)

尚も兵庫西の宮播磨路過て四国中国そこか爰かと
尋れと似よりし名さへなきものから再度浪花に立戻り
塚筋に宿を取りて日々に四方を巡れどもはじめに同じ
緯なれば今は殆ど困じ果或夜四院の寐憤るを待
つゝそつと起出してほの闇がりし行灯の灯揺たて懐中左

*不知火の心筑紫↓しらぬいの【不知火】：「枕」(上代の枕詞「しらぬひ」に
「の」を付けて五音になったもの) (一) 国名「筑紫(つくし)」にかか。上か
らの叙述を受けて「知らぬ」の意味をかけて用いることが多い。(2)「筑紫(つ
くし)」と同音の「尺くす」の意にかけている。(日国語)

*めぐり逢て：「めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半の月影(め
ぐり逢つて見た月が、前に見た月であつたかとも分らないうちに、雲に隠れてし
まつた夜中の月の光よ。——めぐり逢つて見た人が、その人であつたかとも分ら
ないうちに、姿を隠してしまつた人よ。)(『新編日本古典文学全集 新古今和歌
集』雑上・1499・紫式部)

父と母との戒名を取出して床の間に置瀧なす涙を
押拭ひ拝礼なしてさなからに存生の人に物言ごとく「俱
不戴天の仇敵 斯迄帥を分つれど今において手がゝり

(上・9ウ)

なきはなまじ切なる情にひかれ網の中なる魚をさへとり
逃したる不孝の罪申解べき言葉もなし 斯迄武運に
尽たる僕阿容く存命世の人に向べき面もさむらはず
今は父母の尊前にて腹切て相果るがせめてもの申
訳おゆるされて一と言つゝも刀の鞘を抜払ひ袖もて半
をきりゝと巻已に肋に突立んとしたる折柄唐琴の
「ホウ法華経」と轉るにぞ空なつかしき心地して刀持手を
思わずゆるめ聴耳なせしがイヤく彼唐琴の赤繩を

(上・10オ)

撃べき敵も逃せしなり 思へば彼も仇なりと再度刀をとり
直し既に斯よと見へし時またもや告る唐琴に克く
おもへば今はや冬も初旬の更なるに黄鳥来啼いわ
ればあらし 若や意の迷ひかと氣を押しづめて克啼に
紛ふかたなき唐琴なれば開も何所にて啼やらん
不思議くと言ながら廊下に出て二十歩あまり南の方へ
来りしにとある座敷の前にして鶯はたと啼止めば
残り惜氣にイみしが座敷の内には障子の外に人あん

(上・10ウ)

ぞともおもわねば【▲】「コレ六蔵い、かげんに眼を覚ぬか 貴様
も自己も帯大尺様が花浴御逗留の其内は何角世
話に成つたゆへ是非九重太夫様を身請のお供を致よう
と思へばあやにく病氣 這度御状で西陣の織物其外
縹子紗綾縮面冬の支度の調物届けなが隠家
往にも案内は貴様が便り 帯様の御状にもくれく浪花の
船積は夜の内に致て呉るとあるに最う彼は黄刻に
間も有まいやがて船頭も来る時分 起て支度をせぬかヤイ

(上・11オ)

【六】「イヤモ手前の様に口やかましい者はない 今日此津を船出
すりやア直に鳥羽浦遠州灘ひとつ違へば鮫の餌じき
今夜等寛と寐なければ四五日寐そのふかかもしれぬ
手前もぐつと落ついて今ひと寐いりするがよい」【▲】「今から
寐たら夜の内積と言れば趣意が立ぬ 全体旦那の
隠家は遠州と計り聴て居ても名前も自己アしらぬが
今のお名前や御住所は何と言所た【六】「自己ももうつかり名前は
聴ぬがたしか所は秋葉の奥京丸とか聞てゐた」【▲】「往古何とか

(上・11ウ・絵)

源の助

(上・12オ・絵)

源の助響／＼の在家を／＼索兼て／＼已に生害／＼なさんとす

(上・12ウ)

言御公卿が世を忍で居た所故京丸とかいふとの事何は兎も有レ顔でも洗ツて支度をしよう」と立かゝるけるはひに今は源の助さとられては一大事と自己が座敷に立戻り天地を拝して打喜び父母が位牌に額を着「かゝる密支を聴しりしも父母尊霊の唐琴を以て告賜ふ物ならん見よ／＼願ても父より遠州に立越よしや名前は隠す共広もあらぬ片刃土しれざる事も有さるべし」と身支度さへもそこ／＼に晝を運と待居たり

鶯塚千代廻初声四編上巻「了」

(中・1オ)

鶯塚千代廻初声四編中巻

東都 山々亭有人編次

第三回

坂は照／＼鈴鹿は曇る 相の土山降りきる雨もいとはず唳急と逸足出せる一個の莊士 既に鈴鹿の半覆たる田村の社に到し頃垂懸二挺具足櫃同勢都而十四五個坂の下よりいきせきと同じく此所に登り來を件の莊士行違に彼の具足櫃にするしたる名札を見る方雀踊しつか／＼側に

(中・1ウ)

すり寄てやおら乗物の棒鼻を力に任て突たる程に駕を

昇たる雲助のだら／＼とよろめきながら乗物倒と落す

にぞ中なる武士瀧り「難所といへどもたから小坂 乗物落す法やある 不届奴」とありければ件の莊士「さのみ怒せ給ふべからず 御乗物を落せしは御供の衆の過ならず 絶て久しき伯父への御名前を見たるよりあまりの事の嬉しさに意 周章思わぬ 眞平御免」といふ声にぎよつとはせしが不敵の源吾「誰かとおもへば源の助兄うへ横死の其後は

(中・2オ)

お幾佐どの諸ともに袖乞さるゝと聞ながら幕府への聞えをはゞかりて尋ねはせぬが疾仇討て帰国さるゝを待てゐもうすシテ敵源太左衛門トやらが縁糸でもしれもうしたか」
【源の】「父が敵は今以て手掛りとてもさむらわねど弓矢八幡今もつて我等が武士を棄給わずや所領の仇にはめぐり逢たり」
【源吾】「夫は近頃大慶至極シテ其所領の敵といへるは」【源の】「他でもござらぬ 今日唯今鈴鹿の山にて出逢たる同苗源吾といへるもの」トいふに源吾はかや／＼と大口あいて打笑ひ【源吾】「利発な

(中・2ウ)

よふでも未だ子供 御身が父の跡役たる鳴野の郡司を命ぜられ所領をさへ預り居ればしか思わるゝも無理ならず 是には種々子細のある度今話さんも辞ながけれど先荒増を聞かるとし 御身が父源太左衛門嶋田の宿にて横死を遂役儀は淀与三左衛門請取て是を勤尚兄うへを悪さまに言

なし鳴野の郡司を望しかど上御所存あつて命じ給わす
此源吾に跡役を命じ給ふを式度三度辞退は致せど
許し給わず僕つくぐ思へるに若淀なんどに此役義命じ

(中・3才)

られなば今にも御身か仇撃て立歸るとも帰役は寛束
なき事なれば僕枉て綽請なせしも其時御身の復さん
所存然るを所領の仇などとは近頃迷惑至極也 誠所領
の仇といへるは淀与三左衛門ならんかし能々勘弁いたさるへし
【源の】「ヤア比興なり源吾殿言葉を工みて陳ずるとも貴殿
執柄におもねりて父が横死を僥倖にある事なき支讒
言し綽をば淀に譲んとて其手に乗べき源の助ならず
言葉を以て争ふより刃のうへにて返答あれよ」としら刃

(中・3ウ)

拔ツゝ切かゝるを源吾の家来左右より無法な小童用
捨はならしとひとしく抜つれ打かゝるをひらりとばかり
さり又切込むを身を屈め空をうたせてだちゝとよろめく
所をから竹割と血煙り立つて倒るゝを見るより随ふ者共は
主を打棄逃出ス 十四五人の徒者も半はやとひし雲助なれば
何かは愛に争ふべき 命惜やと駆出たり 源吾も今は叶わじと
逃出んとはなせしかど降しく雨に道ぬかり所詮のがれぬ所ぞ
と覚悟なしてや大刀の鞘を払ひて完爾と笑み「斯迄綽を

(中・4才)

わくるといへど承引なくて仇なりと思わゞ是非を論ずも
無用 不便ながらも「ト撃」とこる足もと陸しめゝ一上二下
虚々実々奮逆突戦なしたりしが構むべし佐々木源吾
孝子の刃に敵しがたく鈴鹿の露と消しかば源の助やがて
首搔落し雨尚もらぬ木蔭に持行背中を負ひし
包より父母が位牌を取りだし「いかに父うへ御賢候へ彼は
兵 藤石川なんどいふ執柄家の被官に取入所領を
奪ひし賊なりしが今復讐の首途に此大賊の首を

(中・4ウ・絵)

お梅

(中・5才・絵)

源の助
天縁の奇／罍はからず／お梅の危／難を救ふ

(中・5ウ)

以て軍神の血祭とはなし申さん母うへかならず喜ひ給へ
かゝる吉兆あるうへは敵の首を見む支はいと安かり」と言
つゝも位牌取て猶道を急がんと做す傍に昇棄た
りし驕の中に女のうめく声なすにぞ源の助いぶかしみ
驕の垂を引揚見るにその像容貌は別れたるお梅
に克も似たれども身はいましめに猿轡を深く喰し

事なればしかと面わかたぬものからやがて近寄さる樽
解ばこそ思ひきや紛ふかたなきお梅なれば【源】「ヤ其方は

(中・6才)

お梅かとうして」といふにお梅は嬉しさと亦悲しさを雑交て
先立涙押ぬぐひ【梅】「お別れ申て夫よりは何かからお話し
いたそうやらいろく重る憂難」ト

是より源の助が家出なせし夜おまき大仁が密会
所におもわず赴愛差見たる事をはじめ書置なして
跡をしたひ大仏まへにて大仁にまたも辛目見たりし
時一族重三郎に出逢危難のがれし條より九重
大夫の生死をしらねば先其母を索んと俱に伊勢

(中・6ウ)

路ね赴しに疾九重は帯大尽が隠家にて自害なし
たる釋よりして妹のお八重と重三郎婚姻做せし
事迄をつばらに語りて亦言様

【梅】「抱なくお八重さんの家居に係て居ますうち重三さん
の大病已に命も危きを掛川とやらいふ所に普婆扁
鶴とやらも及はない御名医があるとか言て鍊薬を貰つた
を服と其座にひらきが附夫ほど重イ難病もわづか七日
立ぬうち本復ありしが靈瑞花の咲たる春に逢心地

(中・7才)

重三さんも稚幼時から御医者之家に生れたれど此様
な不思議なおくすりは見聞をするも今がはじめて 定めし
他にも良薬秘法のあるは必定何卒ぞして夫等の秘
薬を伝授されそれを土産に勘当のお詫が致度と菓
を呉た久兵衛さんといふ仁に開て見たれど其人もしらず
由縁を話して憑んだれば久兵衛さんのいへるには手づるが
なふては病家にもむざと見舞ぬ程なれば御弟子をとる
かとらざるかしらねど御医者は原仁術人の浮沈になる事と

(中・7ウ)

いふたらよもや否もあるまい 開てから復往と云ては道
もはなれて居れば方一整ずば戻るばかり 善は急げと
進られモシその先方に落附やうでも一ト先戻つて花浴
へ登り忠大夫迄荒増を語て他に用事もあり其時連て
登るうち暫時待て居よやと出てゆかれたは三月あと
久兵衛さんも夫限り戻らず手紙の便りもなきゆへにお八重
さんは旦暮に泣てばつかり 此頃は眼も泣はらしてしかと
は見へず素より細い世帯なれば見世を出さねば暮しも

(中・8才)

ならず お八重さんが病氣中仕つけぬ業とは云ながら見

*普婆扁鶴：「普婆」は古代インドの五舎城の名医、「扁鶴」は中国 春秋時代の
名医 世にもまれな名医。すぐれた医者。(『日国』)

ても居られず見世に出で往来の人の機嫌をとる 悲しい
中に尚憂は今貴君に殺された源吾とやらの面の憎さ
いつぞや御上のお荷物が鳥羽浦で破船したを見分の
お役とて神戸に逗留して居るうち威張程に／＼あげくの
果には近在より若輩娘を酌にあげよと地頭よりの御沙
汰お八重さんが達者なら其内へはいる所を何をいふにも
病氣ゆへ吾儕が替りに出た所が聞も小縄さいやらしさ

(中・8ウ)

羞面かゝせて遣ろうかと思つたなれど若もまた家難義の
係では気のどくさに柳に受しつと辛抱して居るを往度
毎の無法難題 時々も是非にと招かれて往ばいつもの
あだいやらしさ 最早翌日は出立なり 自己が意にしたがへば
鳴野の郡司が奥様じやといふに借はと心付佐々木源吾ト
名乗からは貴君の所領は伯父様に横領されたと被仰
たを思ひだして様子を見るにいつぞやおはなし遊ばした
御家の系図も所持する様子 出立の驢に紛れ奪取うと

(中・9オ)

ぞんぜしに疾あらわれて此ごとく身をいましめて驢に乗此大
雨にいきせきと登りかゝつた鈴鹿越 どのな憂目に逢かと
思ひがけなき貴君の御声 いかん覚の御腕でも此方は
大勢貴君は忝個 万一怪我でも被成やうかと気はもめ
ながら手足はかなわず 意で八百の神々を拜ではかり

居ました そうして貴君の御本望は【源の】「其方の憂は嘸かしと
思ひやるだに痛しけれど自分が辛苦もしかた／＼」と都而あ
りつる縁由を詳に語て又言様【源】「今其方の言れたる

(中・9ウ)

家の系図の一卷は母人常に御所持ありしにいつぞや最期
の其みぎり紛失なせしものなれば母人を殺せしものは
まさしき源吾にうたがいなし」と源吾が死骸の懐中を探
ればあたる系図の一卷 此時雨も止みたればおしひらきて
読くだし【源】「寔にこれぞ天の賜物 殊に不図母人の
讐を撃たる此場にて其方に逢しも父母尊霊の
導 給ふ所以ならん アラ難有」と押しいたゞきしつかと巻て懐
中なし【源】「心得がたきは重三郎殿 痛しきはお八重とやら

(中・10オ)

殊に其方が斯なりしもお八重の母子はしるまじければ嘸や
案じて居るであろう【梅】「被仰るとほり今朝早く神戸まで
尋に往吾儕が居ぬので今頃は嘸案じておりませう【源】
「どうで自己も遠州へ往には日永は通行路 俣俣雨も止
たれば同道して何や彼の礼もい／＼たし 今暫時其方も置いて
貰ひたし【梅】「左様してあげて下されば同じ度でも吾儕も居
よし【源】「首尾よく仇を撃たる後は復立寄て其方を伴ひ
花浴に登りて忠太夫殿に其方を預けて河内にもどり

(中・10ウ)

帰役なしたる其時は晴て其方を迎ふべし」【梅】「左様なる時は是迄の憂艱難も往古語 吾儕の願ひは届てもお痛しいはお八重さん 思ふ良人に生別憑些少なき世の中を誰を頼みて過すかと人の更とは思われずいつそ吾儕は悲しい」と振の袂を顔にあてよとばかりに泣居たり【源】「不便はいふべきかたもなければ皆何事も世世なり いか程其方が歎いても今は其甲斐あるべからず 三重殿の住れた先も掛川といへば同じ遠州 聞がこときの名医なら尋てしれぬ更は

(中・11オ)

なまし 賊なんどに出逢とも衣類を惜ます予なば式人が二個やみくと殺しもすまじ殺されもせぬはつなれば命には別条ありともおもわれす 爰で兎や角詮義をするより伊勢へ起りて索ねたら其久兵衛といふ人が暗に戻つて居よふもしれず右左するうち日もたける 爰で暮れたら道はわろく女の足では尚はかどらぬ 思ひ直して出かけ様」と諫むる言葉にお梅は漸々驕より出て帯を直し【梅】「それでは日永に往今の話しを致てあげたらお八重さんは嘸お喜

(中・11ウ)

復雲脚が悪なり今にも降て来かもしれぬ」【源】「なるほど空がもめて居る 夫では雨具の用意して」源吾が供の脱棄し合羽を執てお梅に着せ竹の子笠をかむらせて急ぐと

すれば冬の日のいと短かくて庄のに宿りその翌朝は疾起て日永の在ぬいそぎ付けり

第四回

【源】「嘸草臥たろう そうしてお八重さんの家といふのは余ッ程あるかの」【梅】「イエエ竟あすに見ゆる榎がお八重さんの家で

(中・12オ)

ござり升【源】「夫じやあつか五六町だ 思つたよりは疾くきた」と話しながら往うちへ夫が門辺に赴ければお梅は折戸を音信て【梅】「モシお八重さん」と呼ぶにお八重耳ひき立【八】「モシ慈母さん表を誰か叩く様だがまだ錠がしてあるのかへ」【杣】「今朝は大に寐忘れて錠を明るを忘れて居た ハイ」誰方か唯今明ます【八】「疾く明ておあげなさい」と促めるお八重は若ひよつと三重の便りか左もなくばお梅の在家のしれたるならんと意急るゝ娘の気を母のお杣は深くも

(中・12ウ)

扱すぞこらあたりを片付て門の折戸を明けてびツくり【杣】「ヲヤお梅さん克御帰ん被成ました 一昨夜お帰りがないゆへに昨日神戸の日高屋「源吾か」に間に居つたら殿様は寅刻過の御発足 過首はたしか遅くなつて止てくれろと下座敷に泊つたのはしつて居たが今朝は御発駕のごたゝで濟ない訳だが気がつかぬといわれて吾儕も当惑至極 マア立ながらは話しも出来まい サア〜お遣入被成まし」と言つゝ源の助をじろり

と見やり【杣】「モシお梅さんアリアヤアお連でござり升か」トいわれて

(中・13才)

お梅は顔打赤め揉でなしつゝ声をひくゝし【梅】「是は兼々重三さんから御噂申た吾儕の良人源の助でござり升」【杣】「ヲ、〳〵夫は何より耳よりなお話、御隙が取たも貴君ゆへかそんなら苦勞もせまいもの、貴君がかね〳〵お梅さんが涎を流してお話被成源の助様で被為入るか、むかし男といわれたる在吾の君も及ぶまい、御自慢被成も御尤、ヲホ、〳〵吾儕としたことがお馴染もないあなたへ失礼、まづ〳〵あれへと前に立【杣】「コレお八重お梅さんがお帰りで源の助様トいふ仁を御同道被成た」と

(中・13ウ・絵)

源の助／＼お梅を誘引て／＼日永村に／＼いたる

お八重

源の助

(中・14才・絵)

お梅

(中・14ウ)

聞にお八重は嬉しくて椽端迄出迎ひ紅絹の切以て両の眼を拭ひながら【八】「お梅さん克御無事で御帰りが被成りましたそしで源の助様に御逢遊しましたとか夫は〳〵御目出度、何所で

お逢被成ました【杣】「お八重お前もどうしたもので、まだ貴君は「源之助を」御舂鞋さへお解遊さぬに」トいゝつゝ洗足持出れば【源】「これは〳〵憚りト」上にあがら【源】「お前様がお八重さんでお出被成か、イヤナニ慈母様には門口ゆへし、御挨拶も申ませぬ自己めは源の助と申者、不思議な御縁でこれなるお梅

(中・15才)

長々お世話被下段お礼は言葉に尽しがたし、亦御愛女九重殿近しくこそは致しませぬが見知り越には老両度お目にかゝつた事もあり苦界とは申ながら思わぬ人に根引され操を守りて自害されたとお梅より承わり御愁傷は嘸かしの思ひやるさへ涙ながら憂ふし茂き河竹の流にはまたあらざる貞烈、人は老代名は未代、死してこそ遊女の鏡、夫のみならず重三郎殿今に行衛もしれぬよし自己事も望あつて遠州に赴く者なれば

(中・15ウ)

広くもあらぬ掛川宿急度索て進せよう」といふに親子は打喜び【杣】「ア、お嬢から一ト通りお聞遊したのでござあま

*在吾の君一在五中将…(在五)は在原氏の五男の意。位が近衛中将であつたと

ころから) 歌人、在原業平(ありわらのなりひら)のこと。在五。

*河竹の流一かわたけの流れの身…(遊女などの定めぬい身の上の意)「流れの身」に枕詞「かわたけの(川竹)が付いたもの)遊女などの定めぬい身の上。浮き川竹。流れの身。川竹の流れの女。川竹者。川竹。『日国』

せうが奇薬秘法の伝授を許され夫を土産に御勤当の侘を被成下家出したは七月の末つたやがて三月になりまずれど音も沙汰もない故に此嬢は夫を苦に病てとう／＼眼まで泣はらし」といふをお八重が引取て【八】「吾儕が此眼の不自由を見るに見かねてお梅さんが仕付もせぬ茶店業未だ其上に吾儕に代り神戸の日高やへ

(中・16才)

お茶の給仕に出た限で今朝迄もお帰らなきゆへ大体お案じ申ましたにどうして貴君にお逢被成ました【梅】「言てよいやらわるいやらしりませぬが其役人といふ人は原貴君の伯父さんで父上の御死去を僥倖に御所領を盗しのみか母様迄殺した悪人一年にも恥ず吾儕をとらへ仇いやらしい夏ばかり 赤差かゝせて遣らうかと思つたなれど若ひよつと所の難儀にならうかと柳に受れば図に乗て」ト是よりありし緯どもをいと手短かに物語て

(中・16ウ)

【梅】「地獄で仏ともうそうかわざはひ却而僥倖となる吾儕には引換てお前様のお意細さ御察し申して貴君にも御話し申せば今しがた慈母さんに被仰通りさほどの名医とあるからは遠州一円索ねたらしれぬ夏もあるまいと被仰からは遠からず御吉左右がしれませう あまりきな／＼被成たら却て御眼に障りま

せう【母】「貴君が「源之助」あの通りに被仰てくだされば重三殿に逢た意がするような お梅さんの言通りあまり

(中・17才)

きな／＼思やると尚々眼に障らうほどに忘れて居よとも言憎いが些お天氣の時などは外でも歩行は気が晴るそうして貴君遠州にアノお嬢さんをお連れではござりますまい【源】「御迷惑ではござらうが長くはかゝらぬ旅なれば【母】「むさくるしいとは申ながらアノお嬢さんもお馴の夏たしかにお預り申ましたればお心置なく御本意をお遂げせ【源】「三年以来御世話になり未だ其上とは身勝手ながら【八】「お梅さんがお在被成れば吾儕も何かの

(中・17ウ)

お話し相手【梅】「やがて貴君も御本意を遂重三さんにもめぐり逢連立してお帰らならんにか嬉しかりう今から吾儕は夫が楽しみ【八】「何卒左様した便りをば【源】「お聞かせ申もまた／＼隙ドリヤ自己はお暇を随分御加養専一に」ト立んとなすをマア／＼とお仙お八重に止られ復是非にとも言かねて心ならずも此家に止宿し翌は未明に起出で遠つあふみに急ぎけり

(下・1才)

鶯塚千代廼初声四編中巻「了」

第五回

徳而源の助は日永なるお八重が家を発足しよりあまりに道を急し故か鶏眼の病ひとなりけるにぞ夜道のならぬに困じ果屋は猶更道を急ぎ日あらず遠江に到着なし掛川宿に乗りし頃は日も已に未刻さがりなればまだ泊んはあまりに早く尚往先に人家はあらんと守町迄来りしに

(下・1ウ)

行程三里に足ざればいまだ申刻は過ぎるものから今些往てやどらばやと巷里あまりも来りしに疾往先の見へかねしを探るばかりに一の瀬はたどりし頃は日も暮果一歩も進難かるにやどらん人家もあらざれば身体爰に極まりて傍の木の根に腰打掛歎息なせし折柄に小唄唱ふて三四人来かゝる者のありしかば【源】「卒爾ながら些物を御索申度うござり升」

【源】「はい自己めは京」といわんとせしがいはゞ敵地も何所に往被成」

(下・2オ)

同前なるにめつたな夏はいわれじと【源】「イヤナ二京都の者でござり升が些心願で秋葉山に参詣の者初めて故道もしれずモシ此辺に止宿まする人家はござりますまいか」【●】「此街道はわけて物騒ゆへよしんば人家が有たにしろる老人旅は

止宿はせぬ」【▼▲】「そうともく此間の様に物騒ではつまり所の衰微といふ者」ト源の助の顔つくく見やり「夫に其方は鶏眼の様じやの」【源】「イエこの程は鶏眼を病ましたが今ではさきつぱり全快いたしました」【▼▲】「ウン夫は仕合何にしても困る夏であるう」【□】「なんと

(下・2ウ)

お若イの自己共はあき葉の近所で石打といふ所の者じやが夜が明ても帰るつもり徳俣守町迄病人を乗せて往た騒はあり氣にさへかけねば秋葉迄送り届て進せやう」といわれて今更源の助秋葉に用はなき身ながら虚言ぞとも言かねて

しばし返回に困せしが今宵は秋葉に止宿なし翌京丸へ赴べししかぞくと意を流し【源】「さやうなれば御無心ながら爰に野宿もなりかねれば左様して御貴ひ申度」と懐さぐりて金取いだし【源】「これは近頃些少ながら長途の旅に

(下・3オ)

路用は無詮心ばかりの酒代なれど何卒納めて下さいまし」【●】「なんの止被成ればよいに旅は懐が空敷うては老足も出るものじやないし折角の思召しゆへお貴ひ申て置升ぞへ皆の者能お礼を申さぬか」【▼▲】「はいく有難うぞんじます」

【源】「ナニ夫式を御礼で却而痛入」【▼▲】「サアくお乗被成まし」と明たる*老足↓一足：(4)一歩前に踏みだすこと。また、わずかな足の動き。(一手一足で)わずかな労力のたとえ。【日国】

驕に源の助を打乗四十八瀬を疾越て尚山深く昇入しが

【下・3ウ】「サア」お客人秋葉山に來ましたかどうしてこんたの宿坊は「源」宿坊とはなる程初旅だといふ被成故山の勝手をしらぬは道利

(下・3ウ)

其宿坊といふものは俗にいふ旅籠屋同様そこで馴染でもござるか聞いたのでござんすがはじめてなれば夫もあるまい」「爰は自己等が懇意の宿坊此所から下てサア民藏わが身御案内申せよ」とおの／＼此所にて袂をわかち件の民藏先に立いと広やかな所に往しが原來鶏眼の更なれば物の黒白もわかたねば唯民藏に従ひ往しが【民】「サアお客人是にて暫時御待あれ」と小舎めいたる家居に入置待とも彼の來らさるゆへコハ不審と小座敷を明んとなすに盤石以て

(下・4オ)

つなげるばかりにあんなればはじめておどろき开も此家は賊ならずは源太左衛門疾も自己の來るをしりて斯くみしものなるか見よ／＼彼が家にしていかなる手謀のあるにもせよ或ひは賊の山塞たりとも夜だに明なば五百人物の數とは思わねど折も折なる此眼病さわれ眼界は見へずとも多寡でしれたる源太左衛門無道を補くる白痴等死人の山を潰呉んと刀の寐刃をあわせつゝいざや來れと待たれ共音沙汰とてもなかりけり彼方は民藏をはじめとし四人等しく

(下・4ウ・繪)

重三郎

源之助

(下・5オ・繪)

醫師隨電軒／実は佐々木源太左衛門
？難忽ち／僥倖となり／源の助多／年の本意／を達す

(下・5ウ)

隨電軒の前に出【民】「先生今日は掛川袋井東は日坂金谷辺を索ましたがよい鳥もなく已に空を踏所を一の瀬迄來やしたら」【下・5ウ】「秋葉の參詣といふ若髮道に迷つて居やしたから例の通りに騙し込みいつもの座敷へ入置やたが直に料理を被成やすか」【下・5ウ】「殊にそいつは鶏眼の様子夜の明ないうちが宜らう」【隨】「そりや太義であつたあまり帰りが遅イから掛川へでもぐれたかと思つてひと寐入りした所最う明るに間もあるまい鶏眼とありや尚のこと

(下・6オ)

翌日の晩にするが宜らう【民】「イヤモシ先生年は壯が式本差一寸見上げた腰の物中身はしれぬが目方でも赤願ぢやアないようす翌と時刻を延したら定めし先方も不審を打死物狂ひに働やせう」【下・6ウ】「殊に不話話のある嶋原で先生を附ねらふ様子だといふ奴も前髪よもや夫ではないにもしる御油断は

なりません」【●】「シテ先生には其前髪の顔を」【随】「さればしかとは覚ぬが髯簡どもの話には色白で鼻筋通り女にしたら

よかろうとの噂」【民】「夜ゆへしかとはわかりませんが今の前髪も

(下・6ウ)

好男子善は急げといふやすからなんなら直に御料理を」

【随】「なる程汝等のいう通り寸善尺魔の患ひもあれば是

からすぐに料理であるう」【民】「自己も多くの人に逢たが先生

の様に間拍子のいゝものも些ね」【▼▲】「嶋田宿で同苗源太左衛門

を打殺暫時京に逗留中」【民】「蹴上で害した旅人も懷中

物は些かったが医術の秘法を誌した巻」【随】「子供の時

から医者が好きで脈の視様や風邪薬の調合様はしつて居た

ので夫から急に医者と化敵持ゆへめつたには病家に見

(下・7才)

舞た妻はないが夫でも絶ぬ閑しさは天皇は敷非敷自

己にもしれねへ」【▼▲】「まだ不思議のは脈も見ず病状とやらも

しれないのが練葉や丸薬で治るはどういふ縁由でござんせう」

【随】「医者は原仁術ゆへ他では用ひぬ人間の生油が何に

でもはいるゆへ利目の多い此奇特 右や左いふうち時刻が

延る 新參の宗吉に庭に参れと言附よ」といへるにハツと

民蔵が彼の宗吉を呼立てば壺をたづさへ庭口へ廻れば

やがて随竜軒已前の四人を従えて前に源の助を入置

(下・7ウ)

たる広場に赴て民蔵久八長竿持て源の助を入れたる

座敷の左右に隠れ兵太と呼ぶが戸口に赴「兵」「ヲイ御客人

お待遠でありやしたろう サア自己と壺所に來さつせへ」と戸口

明れば案のごとく源の助は刀引提いざと言は一ト撃ト言ぬ

ばかりの身構なれば民蔵やがて長竿以て源の助が向脛

折れよとばかり払ふにぞ万夫不当の源の助も何かは以て

こらゆべき前に倒と転びたるを久八すかさず背骨の當

りを力に任せて打ければアツトばかりに起もあがらず残りし

(下・8才)

式人がのしかゝり左右の膺を捻あげて立木の許に体たを

結附焚木集めて火を燃つけ左右の腕を遠火に燻

次第に焚木を増けるにぞ源の助は身悶なし苦しむ顔を

随竜軒いと笑し氣に打見やり【随】「いゝ貌へ嘸くしからう」

【源】「汝等自己を憐りて愛に釣寄如是生み殺み辛目を見

するは自己にいはなる恨ありや 开も汝達は何者なるぞ」

【随】「さして爾に恨はないが自己は医道を業となす随

竜軒トいえるもの 汝のごとく旅人を捕へ体を燻て油を

(下・8ウ)

絞り衣類大小有金等は骨折る者ゝ酒手にとらせ

*前髪…(3) 元服以前の男子をいう。【日国】

油あぶら生胆いきだん膿味うみ膾はは皆薬用みなやくようにするのだハ「源」仁術にじゆつと聞きたるに人ひとを損こつて薬用やくようになすとは無悲むひのいたし方かた「随」「いらざる過言かたがた 民藏たみざうまだ手ぬるい 宗吉そうきちしつかと油あぶらを絞しぼれ」「かしこまつた」と民藏たみざう久八くわちやます木の葉きのはを挿かあつめ火勢くわんせつを増まして両りやうの腕うでの油絞あぶらしぼれば源げんの助身すけみ次第しだいに劣せれ

果は両りやう眼閉がんぺいて齒はを喰くしばり首くびうなだるれば「民」「奴やつことうく
死し去さました」【随】「ドレ」ト立寄鼻耳口眼たちよきびなみくわんに手てをおしあて、【随】「成程なるほど

(下・9才)

死しんだ【民】「死骸しがいはいかゞいたしやせう」トいふに宗吉そうきち進すすみ出い【宗】「近頃ちかごろ申兼まじましたが未まだ自己じこは生心せいしんの腑分ぶぶんをいたした
変かなければ何卒なんぞこれなる前髪まへかみの死骸腑分しがいぶぶん御免ごめんをねがい
度ど【民】「これく宗公腑分そうこうぶぶんとやは兎も角も衣類いらい大小だいせう
所持しゆじの雑物ざつぶつに手も附つさせる変かじやアごんせぬ【宗】「夫は
素すより望のぞなし【随】「ソリヤ神妙しんめうなねがひ鐘かねも聞きず鶏けいも
啼なぬ山家やまがは時とき空そらへしれぬが最もう東あづまが横空よこぞらだ様子ようす跡あとは
宗吉そうきちに任まかせて置おいて皆みな一ひとト休やすみするがい」【久】「そんなら宗吉そうきち

(下・9ウ)

モシ前髪まへかみが蘇生そせいは突殺つとくせ」ト山刀やまがたな把わたて与よせば【宗】「たしかに
承知じやうち致いたしました」【随】「サア皆来みなきこ」と随童ずいどう軒先けんさきに立たッ、悠々ゆうゆうと
往むかを視み送り懷中わいぢゆうより氣復きふく取出とり枯井戸かゐどの濁にごりし
水みづをやうく袖そでにひたして持来もちり薬諸やくしよとも源げんの助すけが口くちに
そゞぎて介抱けわいなせば漸々しんじんに人心地ひんしんぢの附つきけるにぞ宗吉そうきち側がわへ

すり寄よつて【宗】「めづらしかり源げんの助殿すけのどの トいふにびつくり【源】「ヤ貴殿きでんは
重三殿じゆうざのどのならずや 話はなたき度ど臆度おそ度どどれから疾はやいなす
べきや 先まさし当あたつて聞度きかは貴殿きでんが家出けだをされてより

(下・10才)

久兵衛きゆうべゑとやらいふ人諸ひとしよとも帰かり来きぬとてお人重殿おへんじゆう母御ははごも
こよなき物案ぶつあんじ然しかるをかゝる賊塞ぞくさいに等ひとしき家に居いら
るゝはまことに以もて心得こころえず 开あも此所こゝは何所なにところにて主人しゆじんといへるは
何物なにものぞ【重】「自己じこに翼よくのあらんには貴殿きでんにしらせまほし
かりし爰こゝは遠州えんしゆう京丸きやうまるにて主人しゆじんといふは帯大尽おびだいじん 僕わが此所こゝ
え来きりしはさしもに重おもき病着びやうぢやくの不ふ思議ぎの奇業きぎやうに愈い
たるより其秘法そのひほうをしらんとて久兵衛きゆうべゑ諸しよとも掛川かけがわに
来きッて家いへを索たづねしに随童ずいどう軒けんに端はなく行逢ゆきあ緯いの子細こゝろを

(下・10ウ)

憑よみたるに久兵衛きゆうべゑ諸しよとも連来つれだり 貴殿きでんのごとく生油いきあぶら絞しぼ
らるべきを僕わがは不ふ思儀しぎに命いのちを免まぬれて神文かみぶんなして弟子でしト
なりしが無慈悲むじひにも久兵衛きゆうべゑ殿でんは貴殿きでんのごとき生油いきあぶらとられて
非業ひぎやうの死しをなしたり 僕わがも秘法ひほうの一ひと巻まきを熟覧じゆくらんなせし
其上そのかみにて九重こゝろ太夫たふが讎あだなれば尋常じんじやうの勝負しやうぶはならず
とも寐首みくびなりとも掻か呉くれんと思おもひながらもしかなさば貴き
殿でんが本意ほんいなくおぼさんかよしなき苦勞くらうをなし居いたり

*死し去さしました」こゝねる(一)死しぬ。死し去さする。くたばる。『日国』

貴殿が伊勢を問われたる子細も聞度おもへ共浮木の亀か

(下・11才)

靈瑞花の花持得たる今日唯今疾々奥に踏込で念なふ

本意を遂らるべし 僕 案内仕まつらんと間に此方は雀踊なし
借はいつぞや難波にて彼唐琴が尋に聞し話一と府を合す
れば天にも昇る心地して重三郎を厚く謝し刀引提つかく
と重三と俱に隨電軒が寐所に赴れど斯ぞとは神ならぬ

身のいかでしるべき前後不覚に寐まりたれば源の助は枕辺
に近寄隨電軒をゆり起し【源】「いかに源太左衛門眼を疾覚
して今自己言を克聞 爾先年嶋田宿にて我父源太左衛門を

(下・11ウ)

手に懸先祖盛綱伝来の甲冑并に軍用金奪取て

立ち去る曲者 汝が在家を素んと是迄尽す憂艱難 昨日
迄も今朝迄も唯父母の讎なりしが今こそ当の吾敵本
名多賀源太左衛門と名乗て勝負を致されよ」といへば
彼方に重三郎【重】「宗吉と名を更て汝に荷胆と見せか

けしも医療の秘法を学んぬ為寔は左枝重三郎とて九重
大夫と二世かけしは自己なるハ一といへれば大胆不敵の隨電も
あまりの度にあきれ果言句も出ずありけるがむつくと起て

(下・12才)

刀押把【隨】「斯りたる上からは何をか隠さんいかに多賀の

源太左衛門不便ながらも復撃新参ものゝ宗吉を重三と

しらは恋の讎疾に殺さば小童に敵呼わりされまじき
に今更悔むも無益の赴 呼の音留て呉んず」と達ひ
に白刃を抜あわせ切先よりは火花を散し万宇巴と

きりむすぶ その物音に民蔵久八何事やらんといで
来るを重三は透さず民蔵を肩先したく切さぐれば久八
これはと逃出す 其間にやをら源の助隨電軒を仕留すゝとゞめの

(下・12ウ)

刃差つらぬき傍に置し風呂敷よりまたも位牌を取出し

【源】「父うへ母うへ嘸や御待久しき仇讎を今日唯今撃取
たり 御喜び給われよ」と首揺落して位牌に手向在せる人
に物言ごとく何やらさゝやき居たりしに茶熊の金太と呼なす者の
騒ぎに起出でうかゝ来るを重三はとらへたも切んとなしければ
源の助あはやと止め襟首把て膝下に引居【源】「手前が主人と頼
だる隨電軒は僕が親の仇故討取り 命惜くは助得んが隨
電軒が所持なせる具足櫃はいづくにある【金】「へいゝ命さへお助

(下・13才)

くださらば具足櫃はまだおろか金の有所も御案内申せう【源】「

案内いたせ」と奥まりたる土庫様の所へ赴件の具足下有金
を十箱足すも取出し已前の一ト間を来りけるに重三は望の医書
を取だし夫か是かと見廻すうち中に不思議の一巻あり

これぞ医道の三略なりと説行奥に名宛あり 大明の

播権所望に依て左枝徳齋に予とするせしかば重三は再び打おどろき這は父の所持なるがいかにして随竜が手に入りしやと不審晴ざる其所に金太を先に立せつゝ源の助の

(下・13ウ)

出来るにそ彼老巻を見せ押し金太に故に問ひけるに今参りにてしかとはしらず兎まれ角まれ勘当の土産には是に増ものなしと押いたゞきて懐中なせば源の助は重三に向ひ【源】「多くの貨幣を打棄置てあたら賊の有となすより爰等四院に此金を分ち予んと思ふはいかに」【重】「夫こそ宜敷策ならん」と夫より金太を四院にはしらせ莊官等と呼集へ家財有金そひゝに困ずる者に予たりけり

(下・14才)

第六回

爾れば百姓等は此程より旅人をはじめ所の者さへ折へ見へずなる事あれば倍は神隠の業ならんと思ひ居たるにはからずも随竜忽ち亡ぶるのみか多くの黄金を得たりければ重三源の助を神かとばかり敬ひて皆本國まで送らんと言けるを源の助固辞し金太に件の具足櫃を負せ是なる住居も斯て置なば竟には賊の隠れ家トならん早々焼棄らるべしと残るかたなく差函して遂に

(下・14ウ)

此地を發足なし日を重て伊勢に着し日永村に立ち寄ければお八重お梅が喜びたとふるに物なし重三源の助も諸ともにも有し次第を語聞せ四五日爰に逗留なして久兵衛が菩提を弔ひお八重が家は世帯を仕舞わせお梅お八重母お袖を伴ひ女性は都而驕に打乗日あらず舳津の駅に赴り矢帆の船に打乗て大津に越なば中へに瀬田の長橋巡らんより道近かりと矢帆に赴船はあれ共船人の待ども出て来らねば傍を見るに館菓子などを

(下・15才)

販ける家のありけるが軒には櫓櫓水馴棹立掛あるにぞ船人の家とはいわでもしるければ先促て見むものと源の助は軒近く枯とさし覗けば家にては組つほぐれつ夫婦の鬨諍【女】「なんだ此馬鹿防主め手前故にやア苦勞をした何不自由なく奥様で居るゝ膝方賃仕事三文五文の館菓子を售てありがたいの御持仏のと余慶な世事をいふのも皆んな爾から起つた事だ」【男】「此姥アめ自己だつて爾ゆへにとうゝ寺もお払箱何にもしらねへ長者迄殺して

(下・15ウ)

罪を作つた」と竟口ばしる一ト言か源の助が耳にとまり若やと渠等を見てあるに女は件のお牧にて男は例の大仁なれば倍は長者を害せしか見よゝ自己と重三を

招ぎつかく。此家々踏込ば夫婦は武人を見てびつくり逸
足いだして逃んとす。重三は走りてお牧を押へ源の助は
大仁を高手小手に繰繰長者を害せし。緯の原を糺間
なすに始の程は左に右と陳せしかど竟に長者を毒害
なせしと事分明に白状せしかばお梅の手を以て大仁を斬せ

(下・16才)

了寛お牧は母と名の附に刃も向かねしが良人を殺せし
大罪あれば助命なすべき道あらずと其所の知果に訴へ
ければ有司お牧を糺間做すに疾罪に伏せしかば日あらず
刑に行わんと獄中に繋せられ此一件都而均明ければ重三
源の助等は草津を發足て其日長柄に赴けるにみつば
よつばに殿つぐりせりと歌にぞ詠る家居さへ戸は朽桓は
破れ果茂れるものは八重葎見るにお梅は悲さのやる
かたなきを源の助と重三も俱になくさめて所の者に故を

(下・16ウ・繪)

源の助／旧領安／緒なして／足利／義満公に／拜謁す
源の助

(下・17才・繪)
義満公
淀与三左衛門

(下・17ウ)

問しに長者悲業に果てより間もなくお牧大仁等多
くの金を盗出夜潜に欠落せしかば忠太夫殿娘のお機
とお梅様の妹御小桜様を誘引て程なく家出をされた
りと語に人々再びおどろき奈何なさんとためらひしが所の
者のいへる様ひと先御第に入らせ給へ年来の御恩送りに
自己／＼才覚仕て五年六年は御貢申べしといへるに源の助
も厚く其言葉を謝しかるは受ずとも第を掃除
して給われと請にいと／＼安かりと土地の誰彼皆出来り

(下・18才)

さしにも広き構さへ掃除細々整ふにぞ人々第に入らんと
做す時「ヲ、イ、」ト声懸つゝいきせき愛ね来れる物あり誰にや
あらんと変見るに前に進むは忠太夫後辺に従ふ武人は
小桜お幾なりけるにぞお梅は素より源の助蘇生たる心
地なし違みに疎縁を打侘てお八重母子を引送せ其俣
家に入りて後源の助は重三と俱に都てありつる緯どもを
詳に話ば忠太夫も或ひは憂かりし支を察し或は孝儀を
打感じ復は武勇を賞賛しお柚母子に三年越お梅が

(下・18ウ)

世話になりしを謝し重三が本意を遂しを喜び其一卷は
徳斎殿臈上で賊に出逢て奪ひ取れ給ひしとして殊のふ
惜ておわせしかば御勘当お詫には夫に上越土産あらじ 借僕が

家出なせしは長者殿を害したる大仁お牧の跡を追有金
家財は残りなく流与三左衛門様に預け五畿内大方経めぐれど
竟に手懸りさへも得ず不凶玉造にて雲助の言るを聞ば
彼大仁掠し金にて安治川口に船持となりて有しがわづか一
年立やたゝず賭と淫酒の其為に船も家財も皆なくし今は

(下・19才)

矢帆の渡場に船入なすと聞しかば夜を日に継て今し方矢帆に
來つて様子を聞に疾も悪人大仁防貴君方に討れしと聞て
本意なく喜つゝ未御逗留ましまさんと言故旅宿で聞たれば
今お発足との支なれば急は廻と瀬田の橋廻し丈に送れた
り何は兎も有重置と此縁由流に達れば与三左衛門大に喜
此條を室町將軍へ聞へ上れば御感の餘り鳴野の郡司
故のごとく其他河内に於て加祿を賜り元服なして名も源左衛門
と更御目見故なく濟けるにぞお梅を迎て本妻とせば

(下・19ウ)

お梅はお歌の支を聞知疾に迎て側女とし母には新に知行
を遣し彼京丸を連來し金太を二代の作左衛門となし倍重三
郎は忠太夫の絆の子細を演舌し彼一卷を持參せしかば忽勘氣
の詫成てお八重を妻となしければ從方家財を戻与三左衛門に
男を以て彼小桜に似合忠太夫は多年の忠切室町殿の御聴に
達し御褒美数多賜ば其身隠居又お幾に似合し誓を取是
を二代の忠太夫とせしが各々長男二女設益益々家富米けり

鶯塚千代迺初声四編下巻「大尾」

謝辞

・ 翻字にあたり、千葉大学・岡部嘉幸氏のテキストデータ (https://researchmap.jp/read0057016/published_works) の提供を受けた。また、東京大学国語研究室から翻字許可を賜わった。記して感謝申し上げる。
・ 本研究は、清華大学自主科研計画文科専門経費・基礎研究専項 (W1)、「以《色葉字類抄》为中心的日本古辞書研究与数据库建设」(2023H2WJC31・藤本灯) / JIS 科研費 21K18364・21H00629 (藤本灯) / 21J20733 (佐々木委久) / 23K1822 (久保椋子) の助成を受けたものである。

(ふじもと・あかり)

清華大学副教授

(ささき・いく)

本学大学院博士後期課程・学振DC1

(くぼ・まさこ) 総合研究大学院大学博士後期課程・学振DC1

(たなか・ももか)

本学大学院博士前期課程

(いわさき・りんたろう)

東京大学大学院修士課程

(にしがき・ふうか)

本学大学院博士前期課程

〈編集後記〉

『和漢語文研究』第二十一号をお届けします。今号も日本文学一篇、中国文学八篇、資料一篇と、充実した内容になりました。今号では、巻末に本学教授や院生、学部生、卒業生による共著二篇を掲載しています。改めまして、ご投稿いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

本学は長年、中国・西安外国語大学と提携協定を結んでおります。近年は新型コロナウイルス感染症の影響で双方往来が出来ずになりましたが、今年度は無事、西安からの交換教員・留学生をお迎えすることができました。本学からの日本語教員も、数年ぶりに西安へ渡航しております。また、今年度は日本語学の先生を新たに一名お迎えしました。今後とも国際交流・分野間交流に努め、広い視野をもって研究をすすめて参りたいと存じます。変わらぬご指導のほど、よろしくお願い致します。

本誌は、会員であればどなたでも投稿することができます。次号の投稿締め切りは令和六年九月末日、発行は十一月末日です。投稿をお考えの方は、八月頃までに左記のメールアドレスまで投稿の旨をご連絡いただけますと幸いです。購入希望その他お問い合わせも同じアドレスまでお願いいたします。皆様のご投稿をお待ちしております。

(京都府立大学国中文学会 kokuchubungakkai@ml.kpu.ac.jp)

和漢語文研究 第二十一号

令和五年十一月二十四日 印刷

令和五年十二月四日 発行

編集・発行

〒六〇六一八五二二

京都市左京区下鴨半木町一―五

京都府立大学国中文学会

印刷

京都市左京区下鴨高木町三八―二

株式会社 北斗プリント社